

(博士論文の一部)

明治期の文明理念の諸相とその意義

— 西郷隆盛と勝海舟、中江兆民の文明観を中心に —

名古屋大学大学院 / 国際言語文化研究科 / 博士課程

許 時嘉

(Hsu, Shih-Chia)

富士ゼロックス株式会社 小林節太郎記念基金 2007/2008 年度研究助成論文

謝 辞

本論文は、現在執筆中の博士論文を構成する一部です。そしてこのたび研究成果を論文としてまとめることができたのは、ひとえに富士ゼロックス小林節太郎記念基金のお力添えによるところです。

本論文の執筆にあたって、名古屋大学大学院国際言語文化研究科の前野みち子先生から多大なるご指導を受けました。いつも貴重な時間を割いて、研究内容の指導をはじめ、論文の添削までも丁寧にして下さったことに対し、心より謝意を表します。

また、愛知大学の黄英哲先生からは日頃多くのご助言とご協力をいただきました。未熟な筆者に学界の研究動向を示して下さいましたことに対し、心より御礼申し上げます。さらに、前野佳彦先生からは、貴重なアドバイスをいただきました。このアドバイスがなければ、本論文がこのような形をとることはなかったでしょう。惜しみないご指導とご助言に深く感謝いたします。

最後に本論文は常に温かい目で異国での研究生活を支えてくれている家族に捧げたいと思います。

2009年10月

許時嘉

許 時嘉

(Hsu, Shih-Chia)

目次

ページ

まえがき	1
第1章：「己れを利するは野蛮ぢゃ」——西郷隆盛の文明論	3
第1節：文明開化への批判——『南洲翁遺訓』	3
第2節：連帯と侵略と、紙一重——西郷思想の継承者である頭山満	7
第2章：国威宣伝と国家建設の間で——勝海舟の文明観	10
第1節：連帯による対中国意識	10
第2節：仁政／法政——人民にとって「文明」の政法とは何か	13
第3章：文明と道義——中江兆民の文明観察	16
第1節：西洋文明の暗黒面への認識	16
第2節：進化神の多様性と道義の普遍性——『三酔人経綸問答』	18
第3節：文明の実現は「動物的天性」の克服——幸徳秋水の『帝国主義』	20
あとがき	24
註	27
参考文献	38

まえがき

本稿は西郷隆盛と勝海舟、中江兆民三人の文明論を対象に、明治期の文明観の諸相とその意義を明らかにすることを試みたものである。

明治の文明論に言及する際、先ず頭に浮ぶのは福沢諭吉の『文明論之概略』(1875年)だろう。周知の通り、多くの明治知識人と同様に、福沢はギゾーの『ヨーロッパ文明史』(1827年)とバククルの『イギリス文明史』(1857~61年)から大きな影響を受け、西欧の文明史を国民国家形成の歴史に読み替えることで、文明すなわち近代的な国民国家の全体像の把握に努めた。国家の洋化政策に呼応して活動した福沢は、物質面よりも国民における精神的文明の形成に関心を寄せた。彼は儒教社会の「惑溺」——物事や世の中の真理の形骸化とそれに盲目に追随する心理——とその排除を主張し、人民精神の働きの活発化を狙っている。精神の働きの活発になり、人民の間で自由の気風が自然に広がり、自ら改革と進歩を謀るようになれば、野蛮や半開な状態から文明国家の一因となることができる。福沢は従来の「智徳」という概念から智と徳を分離し、西洋知識を中心とする「智」の蓄積を文明を向上させる原動力と見た。西川長夫が指摘するように、福沢の文明論の狙いは、「権力の偏重(封建制)の打破」と近代国民国家に相応しい「国民」の形成である¹⁾。それ以後、福沢が代表する文明論は、列強と肩を並べる近代国家の建設を目標とする明治政府の中心的な性格を強く規定することになった。

ところが、「文明」そのものは西洋が独占する概念ではない。中国の古典においては、文は「文章、文才(采)、文教(文による教養)」を指し、明は「それを明らかにする、現わす、世に照らし出す」という意味で、文明というのは智徳が相俟ってどちらも欠かせないことを意味している。すなわち東洋社会では、「文明」は文章文才の士大夫的知識を備えることであると共に、多くの場合は徳義と五倫を重視する東洋の道徳律によって規定されている。したがって、西洋のアジアへの武力進出によって触発された東洋社会の反感の多くが、経済的欲求に駆られた列強の「貪婪」な顔に「文明」を全く感じ取れないことを反映していたのである。西洋の物事の全面的拒否や「東洋道徳、西洋芸術」など折衷策の主張、あるいは西洋の進歩的知識を肯定しながら東洋的知識体系の優越性をも強調する主張は欧化政策の代表する文明観が主流となす中に異質の存在として見え隠れている。それは、東洋的な「文明」概念の影響を受けて、明治以来の西洋中心主義的エセ文明観に対する反省と抵抗を表明したものであるといえよう。この東洋的徳義や倫理に基づく文明論は、どのような形で明治期の福沢文明論と重なり、あるいは交差しているのだろうか。また、それらの文明論は、西欧列強との利害競争に打ち勝つことを目指したが故に列強のアジア進出を複製し、中国朝鮮への進出、植民地支配に着手した明治政府の国策に直面して、どのような価値判断によってその国策に迎合し、あるいは懐疑をもって拒否したのだろうか。以下に西郷隆盛、勝海舟、中江兆民三人の文明論を取り上げ、福沢諭吉の文明観との対比を一つの伏線として、彼らの文明論の特徴を明らかにしたい。

征韓を唱えた西郷隆盛は、近代化路線を不可避としていた内治派とは対照的な存在だった。彼が封建勢力の代表者や侵略的膨張論者の源流であることは、多くの歴史家、特に欧米の日本史家にとっては自明なことである。欧米の日本研究者は、明治政府の「文明開化」の内政原則を害する外征論を持ち出した西郷と彼から示唆を得て大陸侵略の「遺志」を受け継いだ国家主義者たちを同一視して、征韓を鼓吹した西郷を日本右翼ファシズムの元凶であると主張している²⁾。しかし、過激な国家主義者だけではなく、中江兆民や内村鑑三、福沢諭吉など西洋思想に「開明」的な態度を示した知識人までも

が西郷の事跡を懐かしく追憶していたという事実はどう解釈されるべきなのだろうか。この事実の分析や関心がこれらの研究者の視野に入っていないのは興味深い³⁾。そもそも西郷が考えた「文明」とは何か。西郷はその封建性によってファシズム侵略思想を生み出した張本人である、あるいは反政府（文明開化）すなわち反近代の代表者である、という地平を越えて、各時代、各立場の知識人の間で共感と呼んだ西郷の理念を再考するのは、それが明治思想の多面的様相を探り出す契機となると考えるからである。

また、日清戦争前後、非戦論を唱えた少数の知識人として、勝海舟の文明論は福沢のそれと対照的な姿を示している。明治初期以来の文明開化政策がある程度まで成果を挙げた明治中期において、海舟の回想談である『海舟座談』や『氷川清話』に現れる明治政府に対する悲観的な眼差しは『福翁自伝』における福沢諭吉の満足した心境と極端なほどの対比を成している。偶然ながら、この奇妙な対照性は中江兆民の回想録『一年有半』における現状否定の態度と福沢の現状肯定の立場にも同様に現れている。これらの対照性に関する優れた研究は既にいくつか見られるが、本稿ではそれらを踏まえながら、福沢以外の、西郷、海舟、兆民三人の文明観を再考することで、近代ヨーロッパ資本社会で形成された「文明」観と東洋社会の在来の「文明」観がいかなる立場や視座において対立関係を形成したか、という問題について明らかにしたい。

第1章：「己れを利するは野蛮ぢや」——西郷隆盛の文明論

第1節：文明開化への批判——『南洲翁遺訓』

『南洲翁遺訓』（以下、『遺訓』）は菅実秀ら旧庄内藩士が西郷隆盛の言葉を記録したものである⁴⁾。『遺訓』は庄内藩士たちの聞き書きで西郷の手による著作ではないが、西郷の政治理念、治国の態度、そして個人の道德観に詳しく触れる極わずかの書物であり、明治以降の西郷の人生観と政治観はこの『遺訓』に集約されていると思われる。日清戦争中の内村鑑三が西郷隆盛を日本の代表的人物として賞賛しうるのは、『遺訓』に溢れる「敬天、愛人」の人生観に共感するからである⁵⁾。井上哲次郎も「人を相手にせず天を相手にすべし。天を相手にして己を尽し、人を咎めず、我が誠の足らざる所を尋ぬ可し」という『遺訓』の内容によって、西郷の思想に陽明学の致良知の系譜が顕在すると指摘している⁶⁾。後世に残されるこれらの西郷評価には『遺訓』の果たした役割がかなり大きい。

『遺訓』には、明治政府の文明開化政策を批判する意図が明らかである。例えば、政府の外国制度の採用に対し、まず自分の国体を確立して国民の風俗教化を正しくしなければならぬと指摘している。自国の立国方針と風俗道德などの精神基盤を定めれば、後は他国の優れた部分を取り入れ、自国の不足を補うことだけで足りる。一旦「猥りに彼に倣ひなば、国体は衰頽し、風教は萎靡して、匡救す可からず、終に彼の制を受くるに至る⁷⁾」。自国の古来の中心思想と精神世界を忘れ去るほど西洋のすべてを盲目的に崇拝すると、自国の行動と自主性はいつか他国に制約されてしまう。だからそれを防ぐために、日本の従来精神基盤を大切にしつつ外国の優れた技術を取り入れるべきだという「和魂洋才」と似たような発想が提起されている。これは幕末における佐久間象山の「東洋道德、西洋芸術」概念と足並を揃えるようにみえる。

この西洋に盲従する態度への批判は政府の大規模な国家建設を対象としてもいる。1869年、明治政府は東京横浜間の鉄道建設を決定し、大規模の電信設備を架設しはじめた。明治政府がそれらを導入しようとしたのは、軍事的危機に直面していた明治初期においては戦略的産業の育成が不可欠であると考えたからである。軍事の近代化の必要に迫られた明治政府にとって、鉄道は国内市場を開拓するとともに国内の軍事的支配を実現するためのものだった。また、電信通信設備が政府の意思伝達を目的とする以上、その架設、利用は官の管轄下に置かれていた。

しかし西郷からみれば、これらの大規模建設がもたらした新たな面目が人民の耳目を一新し、「文明開化」という抽象的な概念がそれらの物質的な新事物を介して人々の脳裏に刻まれる一方、「人の耳目を聳動すれ共、何に故電信鉄道の無くては叶はぬぞ缺くべからざるものぞと云ふ處に目を注がず、猥りに外国の盛大を羨み、利害得失を論ぜず、家屋の構造より玩弄物に至る迄、一々外国を仰ぎ、奢侈の風を長じ、財用を浪費せば、国力疲弊し、人心浮薄に流れ」ることを避けられない⁸⁾。政府は新たな建設を積極的に一方向的に進めながら、なぜ日本にとってこれらの建設が不可欠なのか、という実用性と必要性に対する根本的な検討を全く行わず、単にそれらの不可欠性を先験的に受け入れてしまう。その結果、外国事物の存在の理を認識、懷疑、あるいは批判しないまま、外国事物の吸収を一切の前提としてしまい、西洋崇拜に邁進するようになる。否応なく盲目的に多額の金銭と心血を投じて西洋に倣わなければならないという固定観念に導かれた結果、人心が浮薄になり、日本は主体性を失い、単に他国の模造品に成り下がるという。ここで注目に値するのは、『遺訓』の

批判対象は福沢の惑溺論の批判対象とは全く違うものの、両者の批判の姿勢は「事物に因習する態度」への不満に由来するという点である。ただ、前者は外国の物質文明への惑溺を対象として、後者は旧来の事物への惑溺を対象としている。

西郷によれば、文明は決して物質的な進歩を求めれば済むのではなく、内面的な自律と道徳が必要である。西洋諸国は果たして文明の代表と言えるかという問題に対して、西郷は「国の施政は慈愛を本とすべき」という判断基準に基づき、次のように答えている。

文明とは道の普く行はるゝを賛称せる言にして、宮室の壮麗、衣服の美麗、外観の浮華を言ふには非ず…実に文明ならば、未開の国に対しなば、慈愛を本とし、懇々説諭して開明に導く可きに、左は無くして未開蒙昧の国に対する程むごく残忍の事を致し己れを利するは野蛮ぢや…⁹⁾

たとえ壮大な建築物や施設が完備されても、他者に対する慈愛の心を持たず、自己の利益のみ重んじて他者への侵略を謀る者ならば、決して文明の国と呼ばれるわけにはいかない。文明は「道の普く行はる」と定義される限り、文明国としてやるべきなのは、慈愛の心に基づき、未開蒙昧の他者を懇々切々教導して進歩の正道に導くことである。自己利益の獲得に没頭して他者の生死を残酷に無視するのは野蛮の表現と異ならない、と西郷は考えている。西郷が他国を略奪する行為を徹底的に非難する裏面に、アヘン戦争後の西洋諸国のアジア進出と幕末の安政五カ国条約という不平等条約の締結に対する不満とそれへの反発が働いている。西洋諸国は産業革命以後の機械化による商品の生産過剰を解決するために、海外に目を向け、新たな商品市場の獲得を争って資本主義主導の弱肉強食的な植民地政策を展開してきた。しかし西郷から見れば、商業活動のみを重視する他国への進出は、他人の死活を顧みず利己心から出発する残酷な侵略行動に過ぎず、彼の理解する「文明」と全く縁遠いものである。

西洋諸国の商業活動を中心とするアジア進出を強く批判するのは、西郷の思想根底に強く根付く「重農軽商」という伝統的な士大夫意識と関連していると思われる。『遺訓』が「政の大体は、文を興し、武を振ひ、農を励ますの三つに在り。其他百般の事務は、皆此の三つの物を助るの具也」¹⁰⁾と述べているように、下級士族出身の西郷は東洋的な農本思想からかなり影響を受けた。それゆえ、青年期に藩主の島津斉彬に認められた農民対策の建白から晩年の地租改正への努力に至るまで、農民への愛着は彼の生涯に共通する信念である¹¹⁾。したがって、農民を重視する反面、彼は商工行為を軽視し、商人に対してはむしろ憎悪の感をすら抱いていたのである。西郷は、金銭上の最大利益の追求を最終目的とする商業活動は、私利を営む利己的行為の氾濫と変わらないと考えている。一旦人心が金銭財産に駆り立てられ、わずかな利益を争うことに没頭すれば、必ず節義廉恥を失うこととなり、国に滅亡の道を走らせるに至るのである¹²⁾。西郷の考え方は、西洋資本主義のエートスは神の栄光を増し加える利他心から生じたものにほからぬというウェーバーのそれとは対照的である¹³⁾。

金銭を求めることは利己心に駆り立てられている証拠である、という考え方は福沢にも潜んでいる。しかし、福沢は利己心を批判せず、かえって金銭を求める利己心を国民に要請しようとする。彼は1885年4月29日『時事新報』社説の「西洋の文明開化は錢にあり」において、国の独立に際して

殖産の重要性を見逃してはいけないと主張する¹⁴⁾。殖産の道が開ければ、衣食が足り、礼讓心が起り、教育が行き届き、学問が進め、発明が多くされ、兵備が整い、国権も次第に張れるようになる。しかし、殖産を發展させようとするれば、金銭欲を駆り立てる利己心は欠かせない。それは、彼が西洋の文明開化を観察した結論である。

福沢から見れば、西洋社会においては、東洋社会の商人蔑視の伝統と異なって、富裕の人は王侯貴族に負けないぐらいに声望が高く大いに尊敬されている。だから、西洋社会においては、金銭さえあれば、有形の実物から無形の英名声望まで何でも買える。「自から勞して自から奉ずるの正理」を前提とすれば、その許す限りいくら金銭を求めても憚るところではない。福沢は、学校の休業中に床屋で働いて学費を稼ぐ米国人学生とそれを見て驚く日本人留學生の例を挙げ、仕事と学問を両立させることは西洋社会の最も普遍的な現象である、と指摘する。自から調達した金銭で自らの学問を修め後日の快樂を買うことができるならば、当然他人の手を借りずに済むし、世間にも怪しまれないのである。こうした気風の中に、金銭を平気で求める価値観が西洋社会に自然に植え付けられ、殖産も自然に發達してくるのである。

福沢は、「西洋諸国は今正に錢の世の中にして、其社会の人心は唯錢の一方に熱し、いやしくも正理の範囲内にさへ在れば自利の外に余念なきが故に、殖産の道興るなからんと欲するも得べからず」と説明し、「一国の公は國民の私の集りたるものなれば、私利集りて公利と為り、家財積て國債と為り、以て今日其國々の富強を致したるものなり」と利己心による金銭の蓄積を國の富強に繋げて解釈している¹⁵⁾。日本の近代國家建設に殖産が不可欠である限り、利己心を發達させるのが何よりも肝要ではないか、と福沢は考える。彼は1885年4月末から5月初にかけて『時事新報』に「西洋の文明開化は錢にあり」（4月29日）のほか、「日本は尙未だ錢の國に非ず」（5月1日）、「日本をして錢の國たらしむるに法あり」（5月2日）など新しい金銭觀を喚起する一連の社説を載せたが、金銭意識紛々たる論調が内村鑑三のような宗教者や武士出身の知識人たちの反感を買ったのである¹⁶⁾。

福沢は西郷と同様に、金銭蓄積という行為を利己心の發露として認識しているものの、殖産を駆り立てる金銭欲が國家の資本蓄積に役立つならば、金銭欲が認められるべきだと考える点で西郷との差異を示している。その一方で、日本の資本蓄積の立ち遅れは、鎖國によって植民地の略奪と交易から閉め出されていたことと大きく関係していると思われる¹⁷⁾。ノーマンによれば、明治政府はその立ち遅れを埋めるために産業保護政策をとった結果、發達した資本主義が多くの商品を生産するようになってからも、地租改正の金納化や不在地主の増加によって購買力が低下し、農村における労働力過剰と貧困を生んだ。そして過剰な商品の海外市場を開発する緊要性が浮上したのである¹⁸⁾。また、後述するホブスンの帝國主義に対する考察も指摘するように、資本の蓄積は過剰な商品の出現と海外への市場拡張に基づいて初めて成立するものである。福沢の資本蓄積至上の態度は、後日の日本の植民地獲得への肯定に繋がっていく。ただ、注目しておきたいのは、福沢の資本論は、西洋列強の文明國家の政治体制、經濟体制を早いうちに身につけようとする意図に由来する点である。福沢の唱えた資本の蓄積は、國威の發揚と日本の優越性の誇示を目的としており、産業革命による近代ヨーロッパ型の資本主義の發展と因果関係が逆転させた倒錯的な論理を示しているのは興味深い。

一方、資本と國家構造との関係は西郷の目に留まっていない。利己意識を輕蔑する従来の価値観に基づくならば、維新以来、廟堂ではもっぱら「家屋を飾り、衣服を文り、美妾を抱へ、蓄財を謀」

ることばかりで、かつて「義戦」と呼ばれた戊辰戦争は今や私利私欲の営みを生んだもののようにみえる¹⁹⁾。西郷は、この戊辰戦争の真意と後の政治情勢の変化との落差を厳しく批判し、「天下に対し戦死者に対して、面目無きぞとて、頻りに涙を催」すほど悔恨の情を示している²⁰⁾。新政府の施政による社会の雰囲気と価値観の一変に伴い、幕末の志士たちがかつて抱いていた世間一新の期待は挫折感と無力感に陥った。

ところが、維新後の西郷の西洋文明に対する反発と抵抗はかつての攘夷家に負けないほど強く見えるものの、彼の目に映る西洋諸国の政策や制度は必ずしも全面的にネガティブなものではない。それは『遺訓』における西洋の刑法に対する評価から窺えるのである。

西洋の刑法は専ら懲戒を主として苛酷を戒め、人を善良に導くに注意深し。故に囚獄中の罪人をも、如何にも緩るやかにして鑒誡となる可き書籍を與へ、事に因りて親族朋友の面会をも許すと聞けり。尤も聖人の刑を設けられしも、忠孝仁愛の心より鰥寡孤独を愍み、人の罪に陥るを恤ひ給ひしは深けれ共、実地手の届きたる今の西洋の如く有しにや、書籍の上には見え渡らず、実に文明ぢやと感ずる也²¹⁾。

西郷を感心させたのは、西洋の刑法に残酷の極刑はないことである。西洋刑法の中心理念は、犯人に余計の身体的苦痛を与えるのではなく、如何に罪を償わせ善良な正道に導かせるかということにある。それゆえ、犯人に教化用の書籍を読ませたり、人道上の見地から親族友人との面会に承諾を与えたりするのである。このように人を憐み、弱者に慈悲の心をかける行為は、間違いなく「忠孝仁愛の心」に基づく「文明」の行為だと西郷は考えている。西洋の刑罰制度への感心と評価は、過去に沖永良部島へ流された時の苛酷な牢獄体験との対比から得たものともいえるかもしれない²²⁾。それを最大限に生かした結果、西郷は前述の「文明とは道の普く行はるゝを賛称せる言」という定義に従って、「道」という条件、すなわち「忠孝仁愛」を満たせば、如何なる国でも文明国の一員となりうると想定しているのである。『遺訓』は次のように述べている。

忠孝仁愛教化の道は政治の大本にして、萬世に互り宇宙に彌り易ふ可からざるの要道也。道は天地自然の物なれば、西洋と雖も決して別無し²³⁾。

西郷によれば、「忠孝仁愛」は東・西洋や物質的な進歩の有無を問わず、全世界の治国の基盤となっている。西洋諸国が如何なる先進的な技術を備えるとしても、国を治めるに当っては「忠孝仁愛教化の道」という天地の自然規範に悖るわけにはいかない。西郷が提唱する「忠孝仁愛教化の道」という理念は『遺訓』の所々に散見され、儒家の「仁義」の概念との親和性が強く現われている。為政者の政治理念に言及する箇所において、治国の正しい姿勢とは、「己を慎み、品行を正しくし、驕奢を戒め、節儉を勉め、職事に勤勞して、人民の標準となり、下民其の勤勞を気の毒に」思うことにある、という²⁴⁾。ここで言われる、常に勤勞儉約を奉じ、自分の所為を反省しつつ人民のことを思いやる為政者のあるべき態度は、孟子の「仁君」「仁政」の理念を出ておらず、儒家的民本主義の色彩が濃厚に漂っている²⁵⁾。西郷が「克己」を修身の根本となし、「人は、己れに克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るるぞ」²⁶⁾と利己心を自戒するのは「道」を全うするためである。すなわち、

西郷の文明理念は、仁道の実現であり、仁道の最も分かりやすい判断基準が利己心の有無なのである。この自己利益中心思想を非難する立場から、アジアに対する西洋の「貪婪」な顔つきにしろ、維新後の私利重視の人心浮乱にしろ、すべては西郷の批判の俎上に載せられたのである。「我を愛する心を以て人を愛する也」²⁷⁾、「己れを愛するは善からぬことの第一也」²⁸⁾など自己利益中心への自戒が『遺訓』で繰り返し登場することもこの思考の延長線上にあったのである。

第2節：連帯と侵略と、紙一重——西郷思想の継承者である頭山満

征韓論を想起するならば、一方で西洋諸国のアジア進出を利己主義として厳しく批判しておきながら、他方で日本のアジア進出の正当性を唱えている西郷は、ダブル・スタンダードを曝け出しているかのようにみえる。この「西洋のアジア進出への批判」と「日本のアジア進出への賛同」という思考が矛盾なく西郷の情念に並存する現象は如何に解釈すればよいのだろうか。多くの研究者は西郷の正道思想を持ち出す際に、西郷は征韓論を正当化する思考において常に国交礼儀を意識し続けており、「正道」を踏むことがすべての前提であるので、武張った不平士族の征韓論者とは微妙に相違する、と強調している²⁹⁾。しかし、「正道」という要素が注目される一方、征韓的言論が後の膨張主義とどのように連動していったかについて深く言及されない。

「正道」への執着は確かに『遺訓』のもう一つ重要な思想である。西郷は、一旦正道を志せば、必要となるのはただ自分自身の信念を徹底的に貫徹することだと主張している。西郷は孟子の「天下の広居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行ふ」という言葉を引用し、正道を行う際に人の共感を獲得できるかどうか、生活が困窮であるかどうか、という外的評価を気にしなくても構わないと述べている³⁰⁾。『遺訓』の、「人を相手にせず天を相手にせよ。天を相手にして己れを尽し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし」³¹⁾、「道を行ふ者は、天下挙て毀るも、足らざるとせず、天下挙て誉るも、足れりとせざるは、自ら信ずるの厚きが故也」³²⁾のいずれも、西郷のその人生観を反映するものである。自分が正道にあることを認識した上で、外交上に「正道を踏み、国を以て斃るるの精神無くば、外国交際は全かる可からず。彼の強大に畏縮し、円滑を主として、曲げて彼の意に従順する時は、軽侮を招き、好親却て破れ、終に彼の制を受るに至らん」³³⁾という主張となっているのである。

しかし、西洋のアジア進出を利己的行動と断定するものの、「正道」を前提とした西郷自身の征韓論も、必ずしも利他的行為を意味するものではない。他者への軍事的意図を「邪道」から「正道」に変えても、他者に武力を振るうという行動の暴力的な本質はあくまでも変わらないからである。西郷の朝鮮経略における「正道」性をひたすら強調して彼の侵略的な色彩を払拭しようとするれば、翻って「正道」に逆らう朝鮮・中国への不当な蔑視・差別感情を増幅し、征韓論以降の日本のアジア進出を正当化してしまう可能性がある。

頭山満の大陸理念はその可能性を反映する代表である。「大西郷遺訓を読む」（以下、『読む』と略す）は頭山満が西郷遺訓の個人的な解説と感想を口述し、雑賀博愛が筆記したものである³⁴⁾。『読む』には、山県や大久保など新政府の官員達の奢侈な生活、ないし藩閥政府の官員の欧米諸国への屈服が繰り返し批判されている³⁵⁾。なぜなら、利己心によって相次ぎアジア諸国を植民地化する西欧諸国は決して文明国という美名を得られないものの、上位者はこのような西洋文明を批判せず、さらに唯々諾々として西洋に従うことになったのである。座視しかねる頭山は西洋のアジア進出を次の

ように批判している。

英米なんぞの世界に対する仕打ちはどうぢや。我儘勝手のことばかりして、未開後進国のために、手を引いて教へてやるやうなことは、塵一つでもして居らぬ。支那や、印度や、南洋なんぞの植民地にしたところが、「むごく残忍の事を致し、己れを利する野蛮」国の態度ではないか³⁶⁾。

頭山満は反利己主義という西郷の西洋文明批判を継承した。彼は自己の利益を保全するために他者を残虐に侵略する行為を野蛮と見なし、アジアの植民地化を謀っている西洋諸国の計算づくの行為を徹底的に非難している。真の先進国であれば、暴力で後進国を自己の植民地にしてそれらの人民を奴隷視するのではなく、彼らに協力して良い方向に改善するよう諄々と諭すべきである。このような弱小者への暴力侵犯を否定する考えは後述の勝海舟にも見られる。

しかし、頭山は西洋諸国の弱肉強食を「野蛮」と見て批判したにもかかわらず、近年日本政府が英米の勢力を恐れずアジア進出を果たした行動を大いに肯定し、次のように述べている。

「彼の強大に畏縮し、円滑を主として、曲げて彼の意に順従」するから、いつも英米等からも軽蔑されるのだ。支那事変などでもさうだ。何も英米等に気兼をする必要はないから、日本は何処までも正義の国として押し進んだらよいではないか。単り英米ばかりぢやない、独伊に対してだつて理屈だヨ。日本は日本だ。正しい道をさへ踏んで行くならば、国を以て斃るゝとも、決して恥づべきことぢやない。元来正義人道といふのは弱者の声で、之れを貫くには、強者を圧する丈けの気魄と力がなければならぬのぢや。強国にして正義、即ち南洲翁がいはれたやうに、広く弱小国を憫んで、それぞれ文化を進めしむるのが、之が国を為すの理想といふものではないか。たゞ人の国を征伐して、之を略奪し、苛斂誅求して他の弱小国民を苦しめる丈ならば、何も国家を作つてゐる必要はないのぢや。山賊でも剽盗でも、何でも構はぬ。勝手放題に斬取強盗をすればよいのぢや。苟も坤輿に国する以上、人間らしい道を踏み、天下後世に恥ぢない立派なものにしなければならぬ³⁷⁾。

過去においては自己の意思を貫くことができず、事大主義を以って他者に媚を売っていた日本であったが、支那事変以降のアジア進出が漸く本格化するにつれて、英米らの大国の顔色を見る必要がなくなってきた。こうして屈折せずに堂々と自己主張が出来ることは、正義の表現であり、正しい道を踏んでいる証拠でもある、と頭山は認識している。国家は正義を以って「正しい道をさへ踏んでいく」ことができれば、弱者（弱小国とその国民）を憐れんで助けてやる、という国家本来の意味も自然に実現できよう。その反対に、国家が弱小国民を略奪して苦しめるならば、山賊強盗と変わらない。頭山の発言が西洋のアジア進出の暴力に対する確信、及び西欧勢力からアジアの弱小諸国を救い出さなければならないという連帯感を前提とすることは注目すべきである。

ところが、頭山は絶えず「正義」、「人道」、「正道」の看板を掲げて、東亜の一員として西洋のアジア進出を批判する一方、支那事変以降は日本のアジア進出の正当性を積極的に唱えた。それは奇妙な光景だった。1915年、大隈内閣が中華民國の袁世凱政権と締結した「対支二十一カ条」はドイ

ツ政府から中国山東における日本の利益を取り戻すために、中国の主権を無視して日本の中国における経済・軍事利益を一方的に拡大することを目指していた。かつて欧米との不平等条約から多大な屈辱を味わった日本政府はもはやアジアの被抑圧者の側に立つのではなく、今度は中国に向けて堂々と抑圧者の役割を演じるという変身を遂げた。これを背景に孫文は1924年11月23日に渡日、「日支親善」を前提として、「対支二十一カ条」をはじめ、中国と諸国との不平等条約を取り下げてくれるようにと頭山の協力を求めた³⁸⁾。だが同席の藤本尚則の記録によると、頭山は直ちに孫文の要求を断り、次のように返答した。

貴国四億の国民を以てして、外国の軽侮と侵害を甘んじて受くるが如きは、苟も国家を愛する志士豪傑の之を憤るは当然である。嘗て満蒙地方が露国の侵略を受けし時の如き、幸にして我が日本が相当の実力ありたればこそ、多大の犠牲を払って、唇齒輔車関係にある貴国保全の為め之を防止するを得たのである。依て同地方における我が特殊権の如きは、将来貴国の国情が大に改善せられ、何等他国の侵害を受くる懸念のなくなった場合は、勿論還附すべきであるが、目下オイソレと還附の要求に応ずるが如きは、我が国民の大多数が承知しないであろう³⁹⁾。

孫文が日本の満蒙地方支配に同意する「対支二十一カ条」を不平等条約と見なしたことに對し、頭山は他国からの侵害を防ぐために日本勢力の満蒙地方への進出が必要であると考えている。過去の日露戦争において「唇齒輔車関係にある貴国の保全」が出来たのは、ロシア勢力の南下を抑制する日本軍のおかげである。したがって、中国の国力がまだ強大になっていないうちに、山東や遼東半島が西洋諸国の侵犯を回避しようとするれば、中国と強く連帯関係のある日本に支配される以外に道はない。頭山は、日本の中国支配は中国を侵略する意図に基づくのではなく、中国を保護する立場からの行動であると認識している。このような認識は日本国内で反論・批判を招いたが⁴⁰⁾、その後の日本政府は頭山の見解を踏まえたかのように、中国進出政策を進めていった。

戦前のアジア主義を大陸「侵略」のイメージと結びつけるのは戦後の通説である。それに対して、竹内好は、同じアジア連帯（侵略を手段とするかどうかを問わず）の立場によって、玄洋社や黒竜会のアジア主義を植木枝盛、樽井藤吉、大井憲太郎ら民権派のアジア連帯観から切り離し、対立させるのは難しいことを指摘し、「そもそも『侵略』と『連帯』を具体的状況において区別できるかどうかが大問題である」と述べて、戦前日本のアジア主義の複雑性と多面性を強調している⁴¹⁾。松本健一も竹内好の観点を引用し、頭山満の発言に「侵略／連帯」の二面性を見抜いている⁴²⁾。アジアの連帯感に基づく「武力保護」が必要であるという頭山の考えは、竹内好や松本健一が指摘したように、日本のアジア主義において連帯と侵略が一体両面であることを端的に示している。

第2章：国威宣伝と国家建設の間で——勝海舟の文明観

第1節：連帯による対中国意識

十九世紀のアヘン戦争以降、国際情勢が一変することを察知した勝海舟は、国際関係の立場から日本としての朝鮮の軍事上・政治上の利用価値を改めて認識するようになった。1863年4月27日の日記に、勝海舟は木戸孝允と大島友之允の来訪について次のように記している。

今朝（1863年4月27日）桂小五郎、対馬藩大島友之允同道にて来る。朝鮮の議を論ず。我が策は当今垂細垂中、欧羅巴人に抵抗する者なし。これ皆規模狭小、彼が遠大の策に及ばざるが故なり。今我が邦より船艦を出だし、弘く垂細垂各国の主の説き、合縦連衡、共に海軍を盛大にし、有無を通じ、學術を研究せずんば、彼が蹂躪を通がるべからず。先最初隣朝鮮国よりこれを説き、後支那に及ばんとす。同人悉く同意⁴³⁾。

勝海舟は、朝鮮を討伐しようとするのではなく、西洋諸国に対抗する民族的危機感を前提として、唇齒関係をもつ日本、朝鮮、中国という「三国合縦連衡」の政策を提案している。4月28日の日記にも連帯論を展開している勝海舟は、5月15日の日記に朝鮮に向かうことを「征韓」という語によって記し、廟堂に「征韓」による海軍建設の議を申ししたが、結局「俗吏囂々」、廟堂に反対された⁴⁴⁾。日記の言葉遣いが「連帯」から「征韓」に変化したので勝海舟も「征韓論者」ではないかという疑いが多い論者によって提出されたが⁴⁵⁾、彼は尊攘過激派の圧力を利用して幕府を動かしただけでアジア同盟論者の変わりはないという反論もある⁴⁶⁾。ともかく海舟はあきらめず、1864年に老中酒井忠蹟（1月14日）、水野忠精（2月7日）に海軍振興の意見書を提出したところ、やっと神戸操練所の委任（2月5日）を命じられるに至り、後に軍艦奉行として念願の海軍建設を遂行させた（5月14日）⁴⁷⁾。ただし、彼の急進的な開国策は幕府の忌憚を招致し、わずか半年で解任されている（11月10日）⁴⁸⁾。

海舟自身は晩年の回想談である『氷川清話』において、『海舟秘録』に含まれる「海軍を拡張し、營所を兵庫、対馬に設け、其一を朝鮮に置き、終に支那に及ぼし、三国合縦連衡して西洋諸国に抗すべし」という断片を示し、神戸海軍操練所が日清韓の「三国合縦連衡」構想の一環であることの証左としている⁴⁹⁾。徳富蘇峰が勝海舟を「東亞聯盟論者」とするのはその所以である⁵⁰⁾。海舟の『氷川清話』での発言は後になって修正したものではないかと思えるが、その中心理念は、侵略にせよ、連合にせよ、西欧列強のアジア進出を防止するに朝鮮と中国の存在が不可欠である、ということである。

ともかく、幕末の変動期において、西洋列強の東漸勢力を防ぐために三国連合し中国と結ぶパワー・ポリティックス的理念の持ち主であった海舟は、明治時代に入って官から隠退し、とりわけ特に日清戦争前後に至ると、幕末期と異なって、もっと立体的な東洋観を示すようになった。それは1898年、百日維新の失敗により日本に亡命中だった康有為が海舟の官邸を訪れ、清朝体制の改革について相談した事実に象徴的に見てとれる。康有為は日中合作を提案し、日本の明治維新の成功例を範にとり清国を近代化するに当たって協力してほしいと海舟に説いた。海舟はその場では何も云わずに黙って聞いていたが、後に康有為に次のような手紙を送った。

東洋の諸邦、風化の波及する所を了悉し、改革の順序寛急を詳悉し着手せば、希くは其邦内紛擾を遁れ、民其沢を蒙らん。然るに躁急にして改革の順序を誤らば、内部攻撃百出し、或は内破を促がさん。……我邦の改革、其他、或は貴国の国勢と大に異なるなり。随て難易と着手順序、他人の明きに詳悉なし難きは、大体の形勢其の異なるに源因するを以ての故なり……凡そ大事に臨む者、他人に倚るべからず。是頼むべき者不可頼、亦他人に倚れば、其機を失ひ易し。且つ軽挙躁急なれば蹉跎し易し。豈大事に適すと云はむや⁵¹⁾。

国の改革にあたって、まず軽重緩急の順序を認識すべきだと海舟は強調している。一旦急進して改革の順序を誤り、政府内部の矛盾と民心の混乱を惹起すれば、国は更なる危険な状況に巻き込まれてしまうに違いない。また、改革の順序は国柄によって変わってくるものであって、一国を成功させる方法は必ずしも他国に適用できないのである。海舟は、幕府の將軍統治を経ても日本人はずっと一系の天皇を奉じていた⁵²⁾、という政治観及び「武士道の遺伝」⁵³⁾ともいべき日本人の武勇かつ短気な性格を示し、日本の国柄は中国のそれと全く異なっていると指摘している。両国の条件がこれほど違うのだから、明治維新を成功させた方策は必ずしも中国に通用しないだろう。それを全く認識せず、自国の将来をもっぱら自国の長短すら知らない他国に委ねたり、両国が軽率に提携したりすれば、様々な食い違いによって紛争を引き起し、かえって「改革の順序寛急」を失ってしまう危険がある。康有為への海舟の返事は結局、中国と日本の体質は基本的に違うのだから、中国の近代化は他人の力を頼らず、自力で成し遂げるしかない、ということである。かつて三国連合の建言をした海舟の政治観は、日清戦争の時点に至ってかなり変化していた。

「改革の順序寛急」に対する認識は、海舟自身の国際情勢に対する観察に基づくものである。

近く我朝鮮事件の如き、是が為に国幣空費、全国疲弊の内謗議盛に起り、紛々擾々。深く觀じ来れば、魯国の為に好機会を与へたるに過ぎざる也。躁急浅慮の致す所歟。……凡そ亜細亜の諸邦、西洋諸邦の為に及ばざる姿勢に陥る者、其始に当りて彼を敵視し、後邦内小紛争を發し、其紛擾をして制する力不及、終に力を他に需め、其国随て萎靡するに至る。……魯国の東漸を見よ。其初より計画する所、今日に及んで半ば成るを見る。其歲月、数十年。百練不擾、各洲故障し、合従連衡して隠然支障するも、終に不能の形勢に到り、反て彼が為に前驅者となる如し⁵⁴⁾。

日清戦争後の戦後経営期の国民生活は、1896年から1900年までの五年間だけでも、租税の倍加と物価騰貴によって脅かされつつあり、多くの社会問題が発生していた⁵⁵⁾。海舟から見れば、日清戦争は国庫に負担をかけ、運良く勝利を収めたとはいえ、国内の輿論紛争を再び引き起こし、民心を余計に乱した。日本は国内の紛擾不断に妨げられ、国家の施政方針が停滞したり、空回りしたりして、事態の機先を制することさえ出来なくなった。その結果、一步一步計画的に事を進めてきたロシアに、鵜蚌の争いの中で漁夫の利を占めさせることになった。彼の目に映る清国は決して仮想敵国ではない。日清戦争の前年、1893年3月に書かれた建白書「海軍小記」はこのことを明確に示している。

今哉宇内之形勢を察するに、魯国シベリア之鉄道成就、貨物之運轉其便を得ば、漸次之勢如何不_レ可_レ測、彼が遠大之長策殆ど其半を成す。欧州各国、是を如何と成す哉。東洋貿易一変せむ。或は一朝戦鬪起らば、また如何。此時に当て、強鷲高翔して網すべからず、唯是に当て独力戦はむ者は、清国在る而已。……欧州各国連衡之策、国財を空費し、其中互に猜忌あり、焉ぞ猛鷲の敵にあらむ哉。且哉近年各国互に相ママ競ひ、殆ど力究せむとす。清国は然らず、晩成に興て下民富美、貨物之夥敷、宇内無比、且循々然として速成せず、漸次進て退かず。欧州後來衰頽せば、反して清国富強に到らむ。是、今よりして考究すべき要点ならむ歟⁵⁶⁾。

晩年の海舟は、日清戦争の勝利を喜ぶ福沢諭吉とは正反対の態度を取っており、戦勝への評価が非常に低い。海舟は日本の仮想敵を中国ではなく、ロシアに見ている。一方、「下民富美、貨物之夥敷」という利点を持つ清国は、ロシアに独立で対抗しうるポテンシャルを持っている。さらに、清国は物産の豊富と土地の広大という優れた条件を備えているので、将来欧州列強が一旦衰退すれば、清国の富強が望まれるだろうと海舟は考える。海舟の清国評価は福沢の代表する中国蔑視とは対照的である。

豊島沖海戦が勃発する十日間の前に、海舟は廟堂に「朝鮮出兵慎重論」を建白し、清国との開戦に必死に反対している。清国の海軍は日本に匹敵できないほど貧弱であるし、「無礼驕傲」でもあるかもしれない⁵⁷⁾。しかしこれらを今回の開戦理由にしてはいけない。なぜなら、今回の出兵は名分の立たないものであり、「強者を不_レ恐、弱者を不_レ侮」という道義的原則に基づくならば、「殆ど児戯之観たるに過ぎる」のである⁵⁸⁾。したがって、「兵勢を以て服従」させるよりも、「朝王に説くに大使を以てし、説諭懇篤、邦家之前途また宇内就中亜細亜之形勢、協力同心の先務たる」ことを説くことが何より大事である。忠告の理を知るのにその理を果たさないことは、「隣国交際の実誼」に悖るのである。他国に出兵するにあたって、海舟は戦争の勝敗に着目するのではなく、出兵の名分が正しいかどうかということにまず目に向けた。もし名分が正しくないならば、出兵は止めて、「唇亡びて齒寒し」という隣国の危機感と友愛外交の使命感を以って大使を派遣し必死に説得するしかない。彼は次のように述べている。

朝鮮国之政弊、是を聞くこと久敷。……他邦之積弊を忠言するは隣交之高誼、宜敷以て是を王府に忠告すべし。然共、他邦之積弊を犁革するは、内に省る事第一成るべし。今哉我邦、其忠告之举あらむ歟、我邦内また邦民其宰輔を信ぜず（衆議院建言等を証とす）、況哉隣邦に是を加へむ哉。豈他邦容易嘉納すべからざる処ろ也。区々たる理論に泥み、兵を弄すべからず。必出兵之先第一、確たる大道理在りて存する歟⁵⁹⁾。

海舟は武力的な侵犯を否定して、友好の隣国としての立場に立って日本と朝鮮の外交関係の樹立を説く一方、他国のやり方を批判する前に自分自身に対する反省がまず不可欠であろうと呼びかけている。政府の政策に対する不満や不信感が日本国内にも多く存在するので、自国の人民を納得させないまま他国を説得しようとする行動はありえない。日本の呼びかけを無視する朝鮮の頑迷因習を責める前に、維新以来政府の政策が人民側からの反対と抵抗にどれだけ遭遇したか想起してみる

ならば、他者の忠告を受け入れないという現象が国の野蛮頑迷とは関係なく世界的に普遍的なものであることが分かる。こうして、自己の忠告を受け入れないことだけで「相手の野蛮なる積弊を撤廃する」という旗を掲げて武力に訴えるのは、どう見ても論理にならないだろう。それゆえ、隣国同士は隣国間の外交礼儀を守る必要があり、隣国にどれだけ「積弊」があっても、それを懇々切々と説得して武力侵犯を控えるべきである。海舟は忠告に耳を貸さないという現象の普遍性を説明することによって、朝鮮出兵の理不尽を見事に浮き彫りにしている。

海舟は経済上の商業利益に目を向け、清国との間に戦争を起すことは日本の損である。戦争に勝つことは、日本の国威の宣伝を果たすかもしれないが、中国の軍事上の貧弱と経済上の利権を欧米諸国の前に曝け出し、欧米各国の東漸を加速させる最悪の事態に至る。だから、懲らすという考え方をやめ、欧米の勢力がまだ東亞に侵入して来ないうちに、中国、朝鮮と提携して、商業、工業、鉄道などのインフラを整備し、東亞の利権を東亞自身のものにする方がよからう⁶⁰。「隣国交兵日、其戦更無名。可憐鷄林肉、割以与魯英。(隣国と兵を交じうるの日、其の戦さらに名無し。憐れむべし鷄林の肉、割きて以って魯英に与う)」⁶¹という海舟の漢詩はそのような心境を反映している。

三国干渉による清国への遼東半島の返還をきっかけとして、多くの明治知識人は西洋列強に対する不信感を深め、国権重視の論に転向するようになった⁶²。だが、海舟の場合、一般の輿論と違って、三国干渉に平静な態度を示した。さらに、「東洋の平和の為に」、そのまま還すのではなく、ロシアと相談してシベリアから大連湾までの鉄道建設を続行し、戦争の償金を近代的中国建設に使ってほしいと強調した⁶³。海舟は最初から日清戦争の開戦に反対していたので、三国干渉によって民族意識を挑発されずにいた。さらに、1895年末に新聞に載せた談話において、日清戦争の結果がもたらしたものを「東洋の逆運」と認識し、中国と敵対することは、東洋諸国の脆弱な国力を西洋に曝け出したことを意味する、という⁶⁴。

海舟は中国人の民族性に対する評価が非常に高く、それは周知のように日清戦争後に至って更にエスカレートしていった。『海舟座談』や『氷川清話』には、中国人の性格の大きさを評価し⁶⁵、それと対比して日本人官員の「小さな小党派の争い」を器の小ささとして批判する場面がしばしば見られる⁶⁶。幕末から日清戦争にかけて日本知識人の間に盛んになった中国蔑視の流れの中で、彼の中国観はかなり異色な存在である。1897年7月7日の巖本善治との談話で維新以来日本政府が大機会を誤った事件を問われた際、海舟は「十年の西南戦争と今度の朝鮮征伐(日清戦争)」だと即答した⁶⁷。日清戦争を「機を誤」った事件と見なす認識することには、前述したように「敵を間違ったこと」に対する不満が潜んでおり、中国への好感が入り交じっている。その好感には、『氷川清話』に繰り返されることでもあるが、敗戦に平然としていられる、という中国人の気長で大きい国民性への評価が含まれているし、欧米各国のアジア侵略に抵抗する日中の盟友関係の重要性への認識も潜んでいる。物産の豊かで広大な商業市場が期待できる中国は、アジアが欧米(とくにロシア)の侵略から逃れるために欠かせない存在である。

第2節：仁政／法政——人民にとって「文明」の政法とは何か

1885年の『脱亞論』で西洋の文明国と進退を共にし、東亞の悪友と謝絶することを宣言した福沢諭吉は、晩年の『福翁自伝』(1898年脱稿)においては、過去三十年来の明治政府の文明開化政策がいかにか成功したかを感激し、日清戦争を「官民一致の勝利」としている。一方、勝海舟にとって、

維新から三十年に至った時点は「憲法も出来、国会も開けて、日清戦争まであつたが、これも畢竟財政困難」で、なかなか「面倒な時代」でもある⁶⁸⁾。彼は日清戦争に対して「いくら戦争に勝つても、軍艦が出来ても、国が貧乏で、人民が喰へなくては仕方がない。やれ朝鮮は弱い、支那人の頭を叩いたのと言つて喜んで居ても、国家の生命に関する大問題がそつちのけにせられるやうでは、まだ鎖国の根性が抜けないといふものだ」⁶⁹⁾と酷評している。国の一番大事なことは人民が平穏な生活を送れるかどうかという経済問題である。それに目を向けず、戦争を国威の宣伝として自慢するばかりでは、国家経営の方向が間違っている。同じ時代を生き抜いたにもかかわらず、海舟は福沢と完全に異なる心境であった。

第二次伊藤博文内閣主導の日清戦争の勃発によって、こうした海舟の政府に対する反感と落胆は完全に爆発したといえる。『氷川清話』や『海舟座談』に見られる痛烈な時局批判はその反照である。彼からみれば、文明開化を提唱してきた明治政府は、徳川時代と比べて政策が優れているわけでは決してなく、逆に劣っていると言ってもいい。生麦事件、東禅寺事件、御殿山事件など幕末に起きた多くの外国人襲撃事件は幕末の「蛮風」と定義されたが、文明開化の時代に入っても、1891年ロシア皇太子ニコライを刺した大津事件、1895年清国全権李鴻章が撃たれた事件、同年の閔妃暗殺事件が相次いで起きた。これらの明治時代の外国人攻撃事件の非開化性は昔時と変わらないのではないかと海舟は指摘している⁷⁰⁾。また、1896年6月15日東北の三陸地震大津浪が起きた。多くの被害が出たにもかかわらず、政府は天災に遭遇した地方の被害者に何の対応策も講じず、口で法律規則云々を唱えるだけで責任を逃れるばかりであった。海舟は怒りを抑えられず、同様な被害が生じた場合、徳川幕府は「一方では怪我人や飢渴者を助け、他方では年貢を寛めるから、被害の窮民は悦んで業につく様になるものだよ」⁷¹⁾という。幕府は必ずしもすべてが明治政府に勝るわけではなかったが、海舟が後年に至って幕府を恋しく思うまでになったのは、明治政府の施政に対する積年の不満と非難に由来するものといえよう。

1880年代後半以来、足尾銅山の開発によって多量の銅鉄及び硫酸を含んだ水が渡良瀬川に流入し、1896年6月の三陸地方の大津波を皮切りに、7月から9月にかけて全国的な地震と暴風雨が続き、河川の氾濫などで鉍毒の被害が更に増大した。被害地は栃木、群馬、埼玉、千葉に広がり、耕地数万町歩が不毛の地と化した。1897年3月に鉍毒事件の被害農民は上京請願をして農商務省に陳情を行ったが、警察に追い散らされた⁷²⁾。当時福沢諭吉は批判論を『時事新報』に掲げ、毒さえ知らない素人の樺山が現地を視察するのは事件の解決に役立たないし、大臣としてもっと重要な仕事があるので、専門家を現地調査に行かせる方が効率的だろうと樺山内相の現地視察に反対している⁷³⁾。さらに、福沢は「文明の政法」という概念を掲げ、鉍毒事件は人情よりも法律によって解決されるべきだと主張する⁷⁴⁾。彼は、人民の非法な請願活動を「文明の法律世界に如何にも穏やかならぬ挙動」として批判し⁷⁵⁾、「文明の政法に於て苟も訴ふ可きものは自ずから訴えるの場所あり、斯る不法は断じて許す可らざればなり」と不法行為への政府の鎮圧を支持している⁷⁶⁾。鉍毒事件の責任処置はあやふやな人情や個人感情を基準とするよりも分明的な法律と厳正な裁判に任せた方が妥当である。しかしながら、こうした福沢の法律至上の文明観の立場は、海舟の言葉を借りると、正しく「口で法律規則云々を唱えるだけで責任を逃れる」行為にも見える。

一方、海舟は福沢とは正反対の立場を取っている。彼は樺山の視察に賛成し、陳情の人民にも同情的な眼差しを向けている。彼は、「文明というのは、よく理を考えて、民の害とならぬ事をするの

ではないか」⁷⁷⁾と述べ、政策の文明云々を唱える伊藤博文と陸奥宗光のやり方を認めない。旧幕時代では考えられない鉱山の過度の開発が器械技術の発達によって可能になって以来、文明社会ならではの弊害を伴い、文明社会はかえって過去には存在しない弊害をもたらしている⁷⁸⁾。海舟は、文明は必ずしも善ではないし、野蛮は必ずしも悪ではないことを証し、文明に心酔し、野蛮を非難する人々の価値判断の可笑しさを暴露している。民の害を成さないことは「文明」という理念が成立する基準である。西郷も海舟も、人民の利益を守ることを政府の当然な義務と見て、その義務を果たせるかどうかによって、一国の文明程度を判断する。その考えの中に東洋社会の儒教的仁政統治の理念が見え隠れている。そして、ある種の「志士仁人」のようなエートス——儒教社会の士大夫意識によって人民の苦難や意見を代弁することを自任する責任感——は西郷と海舟に共通しているといえよう。

松浦玲は、日清戦争開戦における日本政府の強引な立場に見て見ぬ振りして、日清戦争の開戦を「文明」と「野蛮」の戦争として合理化する福沢は伊藤・陸奥内閣の「文明」言説と足並を揃えているので、自ずと被害農民の救済には向わなかったことを指摘している⁷⁹⁾。松浦の「文明／野蛮」という概念枠に即した曖昧な分析の表皮を剥ぎ取れば、鉱毒事件の農民（あるいは反政府のあらゆる勢力）に対する福沢の冷淡な態度は、明治政府の軍備拡張の国策と大きく関わるのではないかと考えられる。一日も早く近代国家の一員として認められるようにと軍需工業など殖産発展に没頭してきた明治政府にとって、銅が欠かせない軍事物資である限り、鉱業停止の声を無視して銅山の開発を進めざるを得ないのが政治的な現実即した判断であった⁸⁰⁾。そして福沢は日本の近代国家への変身を夢見る立場に立ち続けたゆえに、近代化に不可欠の工業発展や軍勢力増強の遂行を無批判に受け入れたのは当然だった。殖産の道を拓いて国際間の弱肉強食の軍備競争から抜け出すことを何よりも重要視する福沢が、被害農民に冷淡さを表しても意外なことではなかつたろう。

第3章：文明と道義——中江兆民の文明観察

第1節：西洋文明の暗黒面への認識

明治十四年政変によって確立した薩長藩閥政府は憲法制定に着手し、十年後の国会開設を見込み、立憲制国家への道が確定した。それと同時に、軍備拡張計画が立案され、軍事外交政策の富国強兵政策の路線が本格的に展開し始めた。松永昌三が指摘したように、その流れの中で、翌年の壬午事変は軍事外交政策に拍車をかけた契機である。壬午事変後、日本と朝鮮間の紛争は中国の調停によって一時的に解決されたが、調停内容に満足できない日本政府が朝鮮側の謝罪と弁償で妥協せざるをえなかったのは、清国との正面衝突に勝てる自信がなかったからだった。この調停によって、日本政府は清国の強力なことを知りながら、日本の対朝鮮策が成功するにはまず清国との対決が避けられないことを意識し始めた。それゆえ、将来の日清開戦を想定して軍制改革と軍備拡張の必要性を説く声が高まっていった。

この意見を代表した人物が山県有朋である。山県は明治13（1880）年と明治15（1882）年壬申事変直後の8月15日に上奏した意見書に欧州列強の東洋侵略の必至と清国の軍事力の脅威への強い警戒心を表し、富国よりも軍事力こそが国家の目前の急務であるという立場に立ち、増税による軍備拡張の断行など強兵政策を主張した⁸¹⁾。松永昌三は、山県には富国と強兵が両立し難いという認識があったにもかかわらず、軍事力が国家の独立と国民権利の保全に唯一の良法であることで、たとえ増税が国民の不満を爆発させても断行しなければならないという覚悟があったと指摘している⁸²⁾。こうして壬申事変による国際関係の変動と軍事外交の定着は、その後の明治政府の施政の中心方向を大きく規定した。

しかし、日本の強兵外交に反対の意を示した者は存在する。それは中江兆民である。山県有朋の意見書の上奏とほぼ同時期の明治15（1882）年に、兆民は『自由新聞』に「論外交」という論説を寄稿し、富国強兵策と文明優越意識を批判し、軍事外交の放棄と道義的外交の展開を主張している。兆民は、隣人の財宝に「歆艶妬害の心」を抱いて暴力を用いてその財物を奪おうとすることと同様に、一国に如何なる理由があったとしても、兵を以って他国に侵攻する行動は強盗者の不義の行為に異ならないと強調している⁸³⁾。「漢土古今の儒者も西国歴代の学士も皆戦を以て逆徳となし」、戦争は決して「人生の美事」ではない⁸⁴⁾。これ以上軍備拡張の常態化は、いつ戦争を起してもおかしくないような状況を常態化し、戦争という悪事を普遍化させてしまう。また、軍備を整えるのに大きな費用がかかった結果、人民は国家財政負担のために疲弊する状況に追い込まれることになる。

兆民から見れば、欧州諸国が強兵外交を断行するのは、「隣国交際の道」をまだ悟っていないためであり、やむを得ず軍備競争の形勢を養成したのである。その原因を追究すると、他国の貧弱を望んで自国の隆盛を保とうとする人間の心理と大きく関わっている。人間は「強きを尊び弱きを賤むの情」を自然に持つとはいえ、その情は決して私欲のために起こすべきものではなく、道義のために発するものであるべきだと兆民は考えている⁸⁵⁾。しかし、人智未開の際に、世人はその情を道義のために発すべきを知らず、ただ強いものを尊敬し、弱いものを蔑視し、「道徳の権衡を以ってこれを縄正することなし」⁸⁶⁾。その結果、世の中に「道徳もなく学術もなく、唯己れが機智を奮い己れが威力を逞くし、快を一時に取りて人の驚駭畏懼するを見て以て自ら楽とする者」が現われ、「英雄豪傑」として人々に欽慕され、力の強みはすべてを判断する基準となった⁸⁷⁾。その後、「浮華の武名

に眩惑すること」は人智の発達によってだんだん緩和しても、長い間に温存されていた「己れの強盛を待みて人の微弱なるを軽賤し、己れの文物に誇りて他国の鄙野を侮辱するの悪弊」は容易には取り除かれないものであった⁸⁸⁾。その結果、欧米諸国の人民がアフリカ、アジアの植民地の人民の前に威張っても不思議ではない状況が生じた。要するに、西洋世界の「強きを尊び弱きを賤む」という英雄崇拜的な気質が、欧米諸国が自国の「文明」らしさを誇りつつ、他国を野蛮として差別しようとする感情の原型である。

ホブスン (John Atkinson Hobson) によれば、帝国主義の発生は完全に政治的妄想症の傲慢や愛国心に由来するというより、実は資本主義による過剰蓄積を解消するために外国市場に捌け口を得ようとするものと根本的に関連している⁸⁹⁾。こういう経済的諸動機の上に、資本家や利益者たちはマーケットを確保するため、様々な方法で国家の援助を求めざるを得なくなり、政治力を意図的に利用しようと努めている。ホブスンの論からは、近代帝国主義の生成には資本主義の影がいかにか色濃くさしていたのかということが明らかである。

しかし、兆民は帝国主義の文明観による差別を説明するにあたって資本主義の要素に全く言及せず、文明の暗い影として生ずる差別主義を人間の普遍的な性格の弱点に由来するものとしている。1871年に派遣留学生として岩倉使節団と共に渡欧した経験を持つ兆民は、エジプトのポートサイドとベトナムのサイゴンの商港に上陸した時に見た光景をここで想起している。それは、欧米出身の人民がトルコ人やインド人を犬豚のように扱って、「一事心に慚はざることあれば杖を揮ふてこれを打ち、もしくは足を挙げ一蹴して過ぎ、視る者恬としてこれを怪ま」ない光景であった⁹⁰⁾。彼は次のように述べている。

そもそも歐洲人の自ら文明と稱してしかしてこの行あるはこれを何といはんや。彼れその心以為らく、我れの文物の豊備なる、制度の整齊なる、天下誰れかともに儔ふ者あらん。今この輩は皆一蠢陋の頑民のみ、何の敬待すべきことかこれあらんと。殊に知らず、土耳其、印度の人民もまた人なり。我れの文物制度果して豊備整齊にして人世の美をなすに足るや、世の蒙昧の民を見るときは宜く循々然としてこれを導いて、徐々にその文物制度の美を味ははしむべし。これ固より天の先進の国民に命ずる所の職分なり。是に慮らずして遽に己れの開化に矜伐して他邦を凌蔑するが如きは、豈真の開化の民と稱すべけんや⁹¹⁾。

兆民が考える「文明」とは、「浮華の武名」を求めめるために蒙昧無知の人を虐めることを通して自分の優越感を顕彰するのでは決してなく、自分の優れた所が如何に他者の後進する所を補うか、ということに常に努力し、蒙昧無知の人々を諄々と説き、文物制度の美を味わわせ、文明の道に導き入れるべきである。こうしたことによって、自文明の優れたところが初めて発揚できるし、「文明」と「開化」の真の意味を実現することができる。兆民は、化外の民を侮辱するよりも教化する、という東洋世界の道義的思想をもっている。道義による教化の立場に立つ、兆民の文明理念は、西郷隆盛の「未開の国に対しなば、慈愛を本とし、懇々説諭して開明に導く」という文明観や、日清戦争期の勝海舟が朝鮮問題に関して「(武力よりも) 説諭懇篤」を提唱したことと明白な共通点を有している。

第2節：進化神の多様性と道義の普遍性——『三酔人経綸問答』

兆民の道義的外交の出発点が当時の山県の軍備政策や福沢諭吉の侵略賛成論の視点と完全に異なっているのはなぜか。それは、西洋列強がアジアに侵略してくるかどうかに、についての認識の違いにあるかもしれない。兆民の『三酔人経綸問答』（1887年）は、洋学紳士、豪傑の客、南海先生の鼎談を借りてそれらの差異を如実に物語る傑作である。

洋学紳士の主張は、日本は西洋列強の侵略を避けようとするれば、必ず民主制を行い、自国で自由平等博愛の真理を発揚し、軍備を解除し、一心に道德の学問をきわめて、工業の技術を研究し、純粹に哲学の子となるしかない、という。なぜなら、進化神が規定する「封建制→立憲制→民主制」という三段階に漸次進んでいくのは、進化の理法に随って文明の境地に達する証拠であるから。われわれは進化神に忤らなければ、西洋列強と肩を並べる立場に立てる日々がそのうち来るに違いない。その際、たとえ列強が侵略してきたとしても、われわれが「尺寸の鉄を帯びず、一粒の弾を挟まず」⁹²⁾、礼儀正しく迎えて、信義仁愛の道德を守ったとすれば、彼らは何も出来ないし、彼らの「野蛮を進化させ、文明化させる」侵略の口実も自然に消滅するはずである。われわれが道德礼儀を守ったにもかかわらず彼らが侵犯してくるならば、却って彼らに対し道義なき戦争を引き起こす罪を問うべきであろう。

一方、豪傑の客は、外来の危機が迫っている最中に軍備を解除して相手の良心を頼りにするのはあまりにも理想主義的である、という。彼によれば、弱肉強食は世間万物の生存の理であり、軍事力が強ければ強い程、文明国として称えられるようになる。だから、軍備こそ各国の文明の成果の達成表である。また、弱小国が軍備拡張競争の流れの中で多大の財を投じて他国に遅れた文明の利器を買い取ることは不可能である。その場合、土地の肥えた大国の一部を割きとって自分を富ませるという外国征服の政策が最も有効なのである。さらに、維新以来、国の中に好新（新好き）と恋旧（昔なつかし）の二つの元素がずっと対立しており、それを解決しなければ、いくら進化神の妙用を知っても無駄である。それゆえ、一石二鳥の方策として、海外への進出と内政の整備を同時に行い、武を尊ぶ恋旧元素を弱い大国に侵攻させながら、自国の好新元素を政治制度の改革と風俗の改良に専念させる。そうすれば、国内の対立が自然に解消するし、危ない小国を捨てて安穩な大国になり、弱肉強食の世界の大勢に素早く優位を占めることができるのである。

以上の二つの論理は、明治維新以来日本社会思想の根底に流れる二つの支流である。しかし、この二つの論点には同じ病原が潜んでいる。それは、ヨーロッパの強国は必ずアジアに侵略してくるに違いないという妙な確信である。兆民は南海先生の口を借りて次のように指摘している。そもそもヨーロッパの軍備拡張は互いに警戒し合った結果であるが、国際法が世界各国の規範である限り、ヨーロッパ諸国は道德を無視して輕易に戦争を引き起こすわけではない。したがって、われわれはそれに神経質に反応する必要はなく、自己の正当防衛に必要な軍事力さえあれば十分である。そしてわれわれに悪意を持たない大国の併呑を計るよりも、政治上、積極的に同盟して兄弟国として助け合いそれぞれの危機を脱け出すべきである。また経済上、物産を豊かにすることに努力し、相手国をわれわれの大きな市場とするならば、大きな経済的利益が得られるだろう。

さらに、南海先生は洋学紳士のいう、「進化神」が必然的に西洋諸国の提唱する民主制のような形で来るのだ、という論理を次のように否定している。

その神の行路は迂曲羊腸にして、或は登り、或は降り、或は左し、或は右し、或は舟し、或は車し、或は往くが如くにして反り、或は反るが如くにして往く、紳士君の言の如く決て吾儕人類の幾何学に定めたる直線に循ふ者に非ず。…所謂進化の理とは、天下の事物が経過せし所の跡に就ひて、名を命ずる所なり。…（故に）君主や、大統領や、貴族や、人民や、白布帆の船や、蒸氣機の艦や、火繩の銃や、施條の砲や、佛や、儒や、耶蘇や、凡そ世界人類の経過せし所の跡は、皆学士が所謂進化神の行路なり。歐洲諸国或は死刑を廢せし者有り、是れ自ら歐洲諸国の進化なり、阿非利加種族或は人肉を食とする者有り、是れ自ら阿非利加種族の進化なり。夫の進化神は、天下の最も多情に、多愛に、多嗜に、多欲なる者なり。…若し進化神は生育の仁を嗜みて、殺戮の暴を嗜まずと曰ふときは、是れ項羽が趙の降卒四十萬人を坑にせし時は、進化神は在らざりし乎⁹³⁾。

進化神は、西洋が規定した一直線の進化の理法に随って進むものではなく、実は進むように見えながら退き、退くように見えながら進み、曲がりくねっているし、各文化の特性によってそれぞれの在り方も変っていく。進化神の模様の変化は予想のつかないもので、必ずしも「良くなる」とは限らない。また、一社会の進化の理がこのように成し遂げたとと言っても、他の社会の進化の理は同じ軌跡で同じ形に成り遂げねばならないわけではない。西洋社会にとっての進化の理を進化神の真の姿として盲目的に崇拜するのは、進化神の多様性を認識していないからである。兆民は多元的な文明観を示すことによって、西洋社会の有様を唯一の文明の姿として信じ込み、自国の価値観をそれと置き換えようとする軽薄さを鋭く見抜き、明治日本の文明開化の空洞を批判している。

松永昌三は久米邦武、福沢、兆民の思想を比較するにあたって、次のような興味深い現象を指摘している。福沢は兆民と同様にヨーロッパ人のアフリカ・アジアの諸地域での振舞いの無礼さに対して不快感を覚えたが、威権をほしいままにする愉快を羨望し、英人に代わって東洋に覇権を發揮する意欲を露わにした点で、兆民と大きく意見を異にした。他方、久米邦武は兆民や福沢と同様に、アジア・アフリカの植民地に渡った西欧諸国民の現地住民への暴慢残酷な振舞いに憤慨した。しかし彼はそれらの西欧人民を本国の猾徒無頼と見なし、正真正銘の本国の人民ならそういう乱暴な振舞はしないはずだと想定し、結局西欧文明に対して肯定的な姿勢を示している。松永は、「西欧文明に文明と侵略の二面性がある」にもかかわらず、久米には「本来文明と侵略は相容れないものだとの認識」があり、それが「本国人＝文明人、植民者＝文明から脱落した猾徒という使い分けをせざるをえなくした」のだ、と喝破している⁹⁴⁾。要するに、久米は「文明」を「倫理・道徳」の判断基準から分離することが出来なかった結果、文明と侵略の「一体両面」を理解しえなかったと思われる。一方、福沢は西洋文明の吸収による日本の富強化を自明の前提としているから、西洋と並び立つことを目指すなら、西洋の植民地政策の踏襲が必然的であると見た。それゆえ、彼は倫理・道徳的判断を自然に排除することができたし、欧米人の傲慢な態度に不快感を覚えながらも、他人を支配する愉快に矛盾なく共感できたのだ、という⁹⁵⁾。ここに久米と福沢の西洋文明に対する無批判的な側面が現われている。

しかし、兆民の場合は違う。彼は西洋文明の立派さと東洋世界がそれを模範とする必要性を認識すると同時に、西洋文明に潜む残酷性と侵略性にも気づいている。だから、松永が指摘しているように、兆民は日本の文明化路線を主張する前にまず「道義の東西普遍性」に注目するのである⁹⁶⁾。

兆民からみた道義心は世界共通の鉄則である。一社会の発展はどのような速度で、どのような方向に進んだとしても、道義心を守るのは基本中の基本である。そこから逸脱してしまうと、もはや善の文明ではなくなる。とはいえ、道義心は文明の理念の母胎となるが、残念ながら、現実の西洋文明はこの道義心の元素を備えていないと兆民は鋭く指摘している⁹⁷⁾。彼はかつて蛮夷の純朴さを賛美するルソーの『非開化論』を翻訳した体験を生かし、西洋文明の進歩と残酷が交錯する二面性の真相をうまく捉えてきた。

西洋文明の全容を一刻も早く丸ごと移植し、西欧諸国に匹敵する規模の近代国家を造らなければならないという緊張感から出発した福沢は、日清戦争の勝利を明治政府の開化政策の成果として称賛し、この路線が西欧諸国の歩んできた弱肉強食の武力侵略をそのまま複製してしまう危険に対する反省を全く欠いている。日清戦争の勝利に関するこの解釈を考えるならば、福沢がその晩年に満足した心境を抱くに至ったのは不思議ではない。「文明／野蛮」という西洋的図式と普遍的人間性としての道義心との相剋を意識するかどうか、そしてその図式を無反省に受け入れるのではなく、積極的に解体しようとする意欲があったかどうか、それらの差異が兆民を福沢から明白に隔てるものなのである。

第3節：文明の実現は「動物的天性」の克服——幸徳秋水の『帝国主義』

1901年4月、兆民の弟子である幸徳秋水の処女作『二十世紀之怪物 帝国主義』（以下、『帝国主義』と略す）が警醒社書店から発行された。それはイギリスの経済学者J. A. ホブスンの『帝国主義論』（1902年）の公刊に先立つこと一年、レーニン『帝国主義論』（1916年）に先駆すること十五年である。

前節で述べたホブソンは帝国主義を資本の集中、経済的寄生性、寡頭支配、軍国主義の利用からとらえ、帝国主義を資本主義の本領と弊害によって成り立った政策と見なしてこれを攻撃した。ホブソンは、「帝国主義の行動から資本家的商業的動機を除外し、それを政治的誇大妄想症の傲慢に帰することは誤りである。イタリーにおいても、日本においても、ある種の重要な組織された事業家たちは、この帝国主義の費用の中から利得しようとする立場をとった」と指摘している⁹⁸⁾。すなわち、資本主義が発展すれば、帝国主義の出現は必然の流れであり、帝国主義と共に現われる熱狂的愛国心や偏狭な差別主義は資本家や政治家たちが資本主義の拡張を果たすために取った便宜的な手段に過ぎない。ホブソンの論点を踏まえるならば、帝国主義は急進的な愛国心や差別意識、軍事的侵略などに触発されたものではなく、むしろそれらの意識の方こそ帝国主義の副産物であると見ていい。

しかし、秋水の『帝国主義』は、文明の道義という立場から愛国心と軍国主義を批判の俎上へのせ、帝国主義の醜い面貌への分析を試みたものである。秋水は、「帝国主義はいわゆる愛国心を経となし、いわゆる軍国主義を維となして、もって織り成せるの政策にあらざる」⁹⁹⁾と述べ、列強の植民地争奪というパワー・ポリティクスを愛国心と軍国主義の熱狂に触発された、「野獸的天性を脱する能わざる」行為として批判している¹⁰⁰⁾。

彼は次のように分析している。いわゆる真正の「高潔なる惻隱の心と慈善の念」は「自家との遠近親疎を問わざる」べきであるが¹⁰¹⁾、現在唱えられている愛国心は自家の国土と国人に限り、またその愛は自国への惻隱同情の念に由来するのではなく、他者に対する「憎悪」への反動から生じ、「一

身の利益」、「虚誇」、「虚栄」に基づくものほかならない¹⁰²⁾。例えば、古代羅馬と希臘時代の戦士たちは、敵国を憎悪して討伐するをもって、無上の名誉と光栄と信じている。彼らの敵との戦いの中に現われた忠義と勇敢は常に愛国心の発揚とされるかもしれないが、このような他者への憎悪ないし好戦の心は、実に「野獣に近い」者であり、「同仁」と「博愛」の美德を備えない¹⁰³⁾。いわゆる野獣とは「猜々として同類相喰める」者であるが、一旦知らない者が目の前に出現するや、かえって「畏懼恐慌」し、「猜忌憎悪」によってこれまでの相喰める同類と力を合わせて相手を攻撃する¹⁰⁴⁾。彼らの一瞬の団結による相思相愛は「ただその敵を同じくせるに由れることを、ただその敵人に対する憎悪の反動なることを」本にするのである¹⁰⁵⁾。それと同様に、「外国外人の討伐をもって榮譽とする」愛国心は、他者を憎悪、侮蔑して自分の好戦の心を満足する「動物的天性」の発露に過ぎず、「文明の理想目的の相容れざる」ものである¹⁰⁶⁾。

例えば日本国内における久米邦武の筆禍事件や内村鑑三の不敬事件、尾崎行雄の共和演説事件の発生は、愛国心の看板を掲げ、あらゆる異論を打破して人の思想を束縛し、人の信仰に干渉する意識が普遍化した結果である。また、英仏戦争の時にイギリス国内で巻き起こされた愛国熱狂や、普仏戦争の時に独逸上下が国威国光の虚栄に心酔したこと、あるいは征清の戦いにおける日本国内の清国敵視の氾濫など、すべては一己のためにあらゆる他者を抑圧するという愛国心の偏狭な性格を露呈したものと見てよい。さらに、英仏戦後の不景気によって生じた多くの貧民の窮乏を無視した少数の富豪資本家の無関心さや、ビスマルクが己の野心功名のために独逸上下の生死を賭して残酷な戦争を起したこと、あるいは北清事変の際に日本人軍人が同胞従軍記者の死活を顧みなかった事件などを見ると、愛国心の発露とはその敵に対する憎悪を増すことであって、決して同胞に対する愛情を増すものではないし、一己の虚誇を満足するために多数の利益を犠牲にしても構わない危険な心情であると言える。これらの愛国心は排他的、利己的かつ好戦的な「動物的天性」を母胎とするものである、と秋水は考えている。

秋水が愛国心と「動物的天性」の親縁性を再三陳述することは注目し値する。秋水によると、人類の進歩とは、「人は自ら奮って自然の弊害を矯正する」ことにある¹⁰⁷⁾。いわゆる「自然」とは、ある物を進化させるように、あるいは退歩させるように手を加えることではなく、むしろありのままの状態を保たせ、その物の死活問題を天地自然の力に委ねることである。それと対照的に、「進歩」とは、物質面では「天然物に向って尤も多くの人工を加え」ており、道德面では「多く自然の欲情を制圧」し、「迷信を去て智識に就き、狂熱を去て理義に就き、虚誇を去て真実に就き、好戦の念を去て博愛の心に就く」ことを意味する¹⁰⁸⁾。それゆえ、愛国心の発露とは、自然の欲情を制御できず、野獣的天性を発揮することと解するべきであり、それを「高尚なる文明国民」の行為として称えるわけにはいかないのである¹⁰⁹⁾。

秋水が「動物的天性」への批判を繰り返したことは、「人間—野獣」（状態の優劣）と「作為—自然」（改革力や自制力の有無）という二対の二項対立概念の基軸に支えられた彼の文明観の発露であったと考えられる。すなわち、獣性から離脱したといえる状態とは、人間の道義心による利己心の放棄及び博愛の発揚が始まる時点からである。そして、積極的な作為により獣性から離脱して道德を向上させるか、何もせずに獣性のままに止まらせるか、これが秋水の「文明／野蛮」の概念の分水嶺をなす重要な指標であると考えられよう。こうした「動物的天性」を批判する視座に立つならば、軍備競争を目指す軍国主義とは勿論、一己の迷信、虚誇、好戦の心を満足させるために多数

の利益と幸福、平和を犠牲にして顧みないものと理解されうるわけである。そして愛国心と軍国主義の狂熱が相俟って頂点に達すると、領土拡張の意欲を以って大帝国を建設しようとする帝国主義的情念も必然的に浮上することになる。こうして、生産の過剰による新市場の必要から植民地の占領へ、そして国民の膨張による移民政策の提起へとエスカレートするのは必然の展開である。すなわち、帝国主義の名を以って当然視される軍備競争や資本競争は、最初から一己の動物的欲望から発するものにすぎないと言えるだろう。したがってまた、ここから次のような言葉が聞かれることになる。

彼らがいわゆる大帝国の建設や、必要にあらずして欲望なり、福利にあらずして災害なり、国民的膨張にあらずして少数人の功名野心の膨張なり、貿易にあらずして投機なり、生産にあらずして強奪なり、文明の扶植にあらずして他の文明の壊滅なり。これ豈に社会文明の目的や、国家経営の本旨なるや¹¹⁰⁾。

ちなみに、秋水の利己主義への批判が社会主義への共感に繋がったことは注目すべきである。彼はマルクスが代表する近世社会主義はビスマルク以来の熱狂的な愛国主義の弊害を排除する思潮と認識しており、その社会主義の性格は「迷信にあらず理義的なり、中古的にあらず近世的なり、狂熱的にあらず組織的なり」、その目的は「愛国宗及び愛国宗の為せる事業を尽く破壊する」ことにある、と説いている¹¹¹⁾。興味深いのは、彼の社会主義認識が「愛国心の打破」と「道義心の伸張」から出発しており、「下部構造は上部構造を規定する」という唯物史観の社会主義理論の論理構造と明白にずれていることである。

秋水が提出した帝国主義への根本的解決策はこの道義的認識に触発されたように見える。資本主義は利潤の増加と蓄積を目的とするものである以上、それを以って帝国の拡張と植民地市場の獲得を合理化するのは当然である。それゆえ、利潤の増加と蓄積の必要性をなくすとすれば、すべての問題は自然に消滅されると考えられよう。一方、他者の死活を顧みずに利潤の増加や蓄積のみに夢中するのは一己の欲望を欲しいままにする証拠であり、それを抑制する方法は、ほかならぬ動物的天性の克服と道義心の喚起にあるのである。したがって、一己の欲望を放棄することができれば、資本家たちの間における利益競争が自然に無くなり、各々の利益の壟断の必要も消えてしまう。かつて少数者に占められていた金銭や衣食を多数の民衆に公平に分配することができるなら、皆は同じ経済能力に達し、消費能力を備えるようになる。こうして過去に高く購入できなかった商品の過剰は、消費力のある者の増加によって自然に解決されるし、国旗の威厳を掲げて弱肉強食的な略奪経済を行なう必要はなくなる。これこそ「文明的」、「科学的」、「而してまた実に道義的」なのであろうと秋水は考えている¹¹²⁾。道義心を内包する文明認識の立場に立ち、秋水の帝国主義批判は、西欧経済学者の帝国主義批判とはかなり異なる次元から展開されることになったのである¹¹³⁾。

前述のホブスンによれば、「すべての発達した国家において富の生産と分配が広く行われる」と、「その生産力がその分配の不平等によって束縛を受ける段階に到達する」に違いない。その際、「利潤・利子及びその他の剰余に向けられる過度の分け前は、過剰蓄積への慢性的努力を余儀なくする」¹¹⁴⁾。そのため、外国市場に捌け口を得るために植民地を意識的に獲得する流れは当然である。帝国主義の形成が資本主義の必然的な段階である以上、愛国心や種族差別など偏狭な感情は後から生まれた

手段にすぎなくなる。すなわち、経済構造の変革を望む以外に、帝国主義の弊害を避ける方法はない、というのが経済学者の一般的な認識である。しかし、秋水は道徳的角度から利己主義への批判に立ち、利益獲得や資本蓄積の合理性を疑問視し、次いで利益獲得を土台とする資本主義と帝国主義の出現を批判しはじめた。前述した西郷、海舟や兆民の西洋文明批判を振り返ってみれば、これらの知識人たちが強調した「文明」観には「利己」主義への批判が共通していると言えよう。自己利益の蓄積を目的とする資本家の競争の功罪について、資本蓄積を利己的な行為とするかどうか、そして利己主義は「道徳」の欠如を意味するかどうか、という点をめぐって、東洋と近代の西洋にある種の認識の差が存在することは明らかである¹¹⁵⁾。

あとがき

本稿は、西郷隆盛、勝海舟、中江兆民による明治政府の文明開化政策への批判や西洋文明への批判を取り上げ、明治以来「脱亜入欧」を唱えた文明論者の福沢諭吉と照らし合わせながら、彼らの文明観の共通性と差異を分析、考察した。

まず、最も大きな特徴として指摘しておきたいのは、利己心への批判と道義性の認識が彼らの文明観に共有されている、ということである。西郷隆盛の「利己＝野蛮」という思考はその代表である。西郷隆盛は西洋が自己利益のために他国を略奪する行為を徹底的に非難し、「未開の国に対しなば、慈愛を本とし、懇々説諭して開明に導く」べきなのに、「むごく残忍の事を致し己れを利するは野蛮ぢや」と考えた。西郷からみれば、商業活動に由来する他国への進出は、他人の死活を顧みず利己心から出発する残酷な侵略行動に過ぎず、彼が理解する「文明」と全く縁遠いものである。西郷は、金銭上の最大利益への追求を最終目的とする商業活動は、私利を営む利己的行為の氾濫と変わらないと考えた。そして、こうした利己意識を批判する価値観に基づき、維新以来、廟堂では「家屋を飾り、衣服を文り、美妾を抱へ、蓄財を謀」ることばかりで、かつて「義戦」と呼ばれていた戊辰戦争は現在、私利を営むための行動に変質してしまったと指摘した。アジアに対する西洋の「貪婪」な顔つきにしろ、維新後の私利重視の人心浮乱にしろ、自己利益を目的とするものであれば、すべては西郷の批判の俎上に乗せられたのである。したがって、「克己」の概念は『遺訓』で繰り返し登場している。

勝海舟は道義論を正面に打ち出すことはしなかったが、日清戦争時期の朝鮮問題について「(武力よりも)説諭懇篤」の道義の方策を提唱したことは確かである。彼は、隣国同士は隣国間の外交礼儀を守る必要があり、隣国にどれだけ積弊があっても、それを懇々切々に説得するだけで充分であると主張し、武力侵犯の非道義性への批判をほのめかした。

中江兆民は日本の膨張外交を、一国に如何なる理由があつたとしても、兵を以て他国に侵攻する行動は強盗者の不義の行為と異ならないと強調した。兆民はこう考えた。いわゆる「文明」とは、「浮華の武名」を求めるために蒙昧無知の人を虐めることを通して自分の優越感を誇るのではなく、むしろ自分の優れた所が如何に他者の後進する所を補うか、ということを常に努力し、蒙昧無知の人々を諄々と説き、共に文明の道に赴くべきである。こうした道義性は、東西洋共通の理念であり、この道義性の実践によって、自分の文明の秀さを初めて発揚できるし、「文明」と「開化」の真の意味を実現することができる。さらに、人間は「強きを尊び弱きを賤むの情」を自然に持つとはいえ、その情は決して私欲のために起してはならず、道義のために発すべきものである、という。つまり、利己心などの私欲を自制するのが道義の表現であり、「文明」そのものの実現でもある。兆民の弟子である幸徳秋水が私欲を「動物的天性」と見て、それと文明との相克を再三再四陳述したのも、その所以である。

この道義重視に基づく西洋文明批判の視座は、彼らのアジアへの眼差しの差異によってさらに二分化された。一つは西郷の征韓論から始まった日本の大陸侵略の路線である。西郷隆盛の信念を受継いだ頭山満は自己の利益を保全するために他者を残虐に侵略する行為を野蛮と見なし、アジアの植民地化を謀っている西洋諸国の計算づくの行為を徹底的に非難した。と同時に、西欧勢力からアジアの弱小諸国を救い出さなければならない道義的な連帯感を前提として、日本のアジア進出の正当性を唱えた。西洋排斥論者の立場から、日本は、西洋支配から大東亜の解放を実現できる唯一の国だと思われたのであった。

もう一つは、兆民と海舟の平和的なアジア連帯論である。彼らは道義性の認識に基づき、西洋のアジア進出を否定し、アジアの共同体として中国、朝鮮との親密な関係を強調した。幕末期の海舟の「三国合縦連衡して西洋諸国に抗すべし」という考えをはじめ、日清戦争への批判や中国人の国民性への好感など、いずれもアジアとの連帯感に基づくものである。西欧列強のアジア進出を防止するために朝鮮と中国との協調を欠いてはならない、というのが海舟の中心理念である。兆民も道義論の視座から、西洋からの侵略を危惧するなら、中国の併呑を謀るよりも、兄弟国として助け合い、経済上の営みに尽力してそれぞれの危機を脱け出すべきであると説いている。

同様のアジアとの連帯感を持っているからといって、海舟と兆民は頭山のように日本の大陸進出を西洋からの大東亜の解放とは考えなかった。海舟の理由は、日本の対清戦争が中国の軍事上の貧弱と経済上の利権を欧米諸国の前に曝け出し、欧米各国の東漸を加速させることになるからである。また、兆民は頭山満と親交があったが、西洋諸国の軍備拡張がいくら発展してもある種の国際法的な規範を無視してはならないゆえに、われわれも神経質に反応する必要はないと考えたのである。

また、日清戦争の勝利を文明開化の成功と見て満足した福沢に対し、兆民と海舟はそれぞれ正反対の立場を構えた。福沢は中国に戦勝したことをアジアとの連帯からの脱皮と見て、「亜細亜東方の悪友」及びその後進的な儒教思想体系とやっつけじめをつけることができたと考えた。しかし、兆民が指摘した進化神の多様性によれば、一社会の進化の理がこのように成し遂げたとしても、他の社会の進化の理も同じ軌跡を辿るわけではない。西洋社会の有様を唯一無比の文明の姿と信じ込んで、自国の価値観をそれと置き換えようとするのは、明治日本の文明開化の空洞を招くだけである。一方、海舟は人民の立場に立ち、国威宣伝以外に何の役にも立たないとして、日清戦争の無意味を指摘した。国の最も重要な責務は人民が平穏な生活を送るかかどうかという経済問題の解決にあるのに、それに目を向けずまま国威宣伝のための戦勝を誇るのには、国家を経営する方向を誤るだろうと海舟は考えた。さらに、人民の平穏な生活を重視する立場から、足尾鉍毒事件においても、文明とは民の害にならないはずなのに、近代国家建設の一環である殖産政策は人民の死活を無視するばかりだと徹底的に批判した。その態度は、同じ鉍毒事件における人民の非合法の請願運動を「文明の法律世界に如何にも穏やかならぬ挙動」と批判した福沢の冷淡さと真っ向から対立する。

しかし、日清戦争や大陸進出など対中政策において同じ主戦的意見を展開した福沢と頭山の背後に、アジア連帯とその離脱、という二極的な意見の対立が存在したことは看過してはいけない。福沢の「脱亜入欧」に対し、頭山が代表する玄洋社や黒竜会の右翼大陸浪人たちの対外主張は、西洋からの侵略に抵抗するために大陸進出を介してアジアの連合を完成することだった¹¹⁶⁾。列強東進に対する危機感を背景にして、一方は朝鮮とその宗主国の清国に勝つことを列強の仲間入りと見なし、もう一方は腐敗の清国から独立を得たアジア諸国を日本の指導のもとに置き、アジア諸国との軍事同盟の結合を借りて西洋の侵略を防ぐことを主張していた。その結果、彼らはそれぞれに異なる思想（弱肉強食の国際観／抑強扶弱の道義論）を擁護したにもかかわらず、主戦派に合流することができた¹¹⁷⁾。

反利己主義は道義心とともに東洋の倫理的イデオロギーの一つとして、東洋古来の儒教的な道徳律を築き上げた。近代啓蒙主義以来、資本主義をある種の「個人意識」や「自由」精神の表現と見て肯定する傾向が西洋で普遍化したことに対して、ある種の商人蔑視の如く、資本家の資本蓄積とそれに関する行動を「貪欲」の発露や「利己心」の表現として敵視するのが東洋古来の普遍的な見方である。一方、幕末に米国に留学した新島襄が米国の教育、福祉事業を見て、「仁政の支那、日本に勝れる事こ

こにおいて見るべし」と感激した場面¹¹⁸⁾や福沢の家庭観や女性論、教育論にある種のブルジョワ的な倫理観が貫かれていたことを見ても、西洋社会に道徳観や倫理観がないわけではもちろんない。本稿の狙いは、西郷、海舟、兆民三人と福沢諭吉との対比を通して彼らの文明観の優劣を判断するのではなく、近代ヨーロッパ資本社会で形成された「文明」観と東洋社会に固有の「文明」認識が如何なる立場や視座において対立関係を成したかを明らかにすることを目指した。この問題を常に念頭に置きながら、これら二つの異質な文明観が交錯する中に、明治期の膨張主義の下に日本人が他者を「文明化」しようとする使命感がどのように生成したのか、という精神構造の解明を今後の課題としたい。

註

- 1) 西川長夫『[増補]国境の越え方——国民国家論序説』(平凡社、2001年) 241頁。
- 2) ノーマンがその典型的な例である。彼は西郷と彼の精神的後継者たちの膨張主義と特権意識を強調する武士の封建的で保守的な性格とは共通すると指摘し、西郷を「極端な国家主義団体の設計者」と見て、戦前日本の大陸侵略思想の源流としている。E・H・ノーマン「日本政治の封建的背景」(大窪愿二訳、『ハーバート・ノーマン全集第二巻増補』所収、岩波書店、1987年) 251頁。
- 3) ノーマン等の視座はある意味でヨーロッパ型市民リベラリズムの限界——あらゆる「封建」的なものを「自由精神の敵」と同一視し、批判すること——を示している。その限界に気付き、後年橋川文三が西郷隆盛の「封建的」精神性にあらためて分析を加えたのは、ヨーロッパ型リベラリズムにとらわれていた日本の「封建性」理解を再考し、反省しようという意欲からである。橋川文三「明治人とその時代」及び「西郷隆盛の反動性と革命性」(『橋川文三著作集3』所収、筑摩書房、2000年)を参照。
- 4) 『遺訓』は1889年1月に庄内藩士の手によって刊行された。西郷隆盛は戊辰戦争で降伏した庄内藩に寛大な措置を下したことで、庄内藩の多くの人々から感謝と敬慕の念を寄せられた。1870年12月から庄内前藩主酒井忠篤が藩士七十余名を伴い、兵学修行に鹿児島に出向いて翌年3月まで滞留して以来、庄内人でわざわざ鹿児島に赴き、西郷隆盛を訪れる者は多かった。1874年1月の酒井了恒、栗田元輔、伊藤孝継の三人、同11月には赤沢経言、三矢藤太郎の二人、1875年5月には菅実秀ら八人など、彼らは西郷の教えを受け、西郷の言葉を心に刻み、ノートに筆録した。1889年、西郷の賊名が取り除かれた後、菅は赤沢と三矢に西郷の言葉の編纂を命じ、西郷が生前語った言葉や教訓を記録した手記を元にして遺訓集を作成し、翌年1月に刊行した。
- 5) 内村鑑三『代表的日本人』(鈴木範久訳、岩波書店、1995年)参照。この作品は日清戦争中に“Japan and Japanese (日本および日本人)”と題して発行されたが、1908年に“Representative Men of Japan (代表的日本人)”と改訂改題された。
- 6) 井上哲次郎「西郷南洲の思想系統」『日本及日本人』1925年1月号。
- 7) 山田済斎編『西郷南洲遺訓』(岩波書店、1993年) 7-8頁。
- 8) 前掲『西郷南洲遺訓』8頁。
- 9) 前掲『西郷南洲遺訓』8-9頁。
- 10) 前掲『西郷南洲遺訓』6頁。
- 11) 例えば、西郷がそれまで士族の任務であった戦闘行為を庶民に課す徴兵令に承認を与えた背後には、農民を愛する思想が潜んでいると研究者は指摘している。田中惣五郎『西郷隆盛』(吉川弘文館、1958年) 290-291頁。
- 12) 『遺訓』の第16条に「節義廉恥を失ひて、国を維持するの道決して有らず、西洋各国同然なり。上に立つ者下に臨みて、利を争ひ義を忘るる時は、下皆之に倣ひ、人心忽ち財利に趨り、卑吝の情日々長じ、節義廉恥の志操を失ひ、父子兄弟の間も錢財を争ひ、相ひ讐視するに至る也。此の如く成り行かば、何を以て国家を維持す可きぞ」と書かれるのはその所以である。前掲『西郷南洲遺訓』10-11頁。

-
- 13) 西洋資本主義を利己心の下に築かれたものと認識した西郷と異なって、ウェーバー (Max Weber) は西洋に発した資本主義を利他的行為として受け止めている。ウェーバーは合理的経営による資本増殖と合理的な資本主義的労働組織が経済行為の方向を決定する支配的な力となるかどうかによって、近代資本主義と前近代資本主義との一線を画した。金銭の営みへの欲望は古来から存在するが、営利に際して利己的に振る舞うのが一般的であった。しかしプロテスタントは営利を求める際に食欲を抑える「理性」を持ち、「合理的」に利益を増やす特有の経済的合理主義への愛着を示している。このように、あえて食欲の情欲を抑えて内面的規範に服するのは正しく理性の表れであろうとウェーバーは考えている。マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(大塚久雄訳、岩波書店、1989年)第1章第2節「資本主義の『精神』」及び第2章プロテスタント各教派のセクト化に関する分析を参照。
 - 14) 福沢諭吉「西洋の文明開化は錢に在り」(『時事新報』1885年4月29日、『福沢諭吉全集10』所収、岩波書店、1970年) 269-272頁。
 - 15) 前掲「西洋の文明開化は錢に在り」272頁。
 - 16) 1897年4月27日付けの『萬朝報』の薩長政府および九州人を批判する社説において、内村鑑三は福沢諭吉の金銭論を金銭崇拜の「拝金宗」と見なして非難している。内村は、「徳義は利益の方便としてのみ貴重なるに至れり、武士根性は善となく悪となく悉く愚弄排斥せられ」るものとなつ福沢の論は、「遠慮なく利慾を嗜みし者」の論に過ぎないと指摘している。内村鑑三「胆汁数滴」『内村鑑三全集4』(岩波書店、1981年) 134頁。また、もう一つよく知られた事例は土屋元作の追憶である。後に『時報新聞』に入社し、福沢の信頼を得た記者土屋元作は当時、福沢の金銭欲の鼓吹が日本の気風を腐敗させる一方ではないかという疑問を抱き、福沢に対する強い嫌悪感まで覚えていた。土屋は後に自分の嫌悪感が武家育ちによる金銭を軽んじる性癖に由来するものと考えている。土屋元作『余が見たる福沢先生』(三和出版社、1903年) 参照。
 - 17) ノーマンから見た幕末の日本の商人は、海外への道が閉ざされていたために、大名や武士に対する貸金の利子など封建制度の社会構造に依存せざるをえない一面を備えていた。彼らは幕府や藩政府と協力して限られた市場で活動した結果、16-17世紀のヨーロッパ商人と較べて「貿易と略奪による資本蓄積」を恣意的に果たせない「消極性」を持ち、控え目な活動に満足せざるを得なかった。このように多くの規制を受けた経済構造は、日本の資本蓄積の速度をヨーロッパの大貿易国より遅らせることになった。E・H・ノーマン『日本における近代国家の成立』(岩波書店、1993年) 第3章と第4章参照。
 - 18) 前掲『日本における近代国家の成立』第5章参照。
 - 19) 前掲『西郷南洲遺訓』6頁。
 - 20) 前掲『西郷南洲遺訓』6頁。
 - 21) 前掲『西郷南洲遺訓』9頁。

22) 1862年の閏八月、西郷は寺田屋騒動関連によって藩主の久光に遠島を命じられ、徳之島近辺の沖永良部島へ追放されていた。最初の三ヶ月間において、戸もない壁もない二坪ほどの荒格子で、冷飯と焼塩の食事をとり、居所と便所を共にして入浴も出来ない過酷な生活を過していた。後で獄舎の番人土持政照の建言によって新たに牢舎がやっと立て直され、西郷の牢獄生活が改善された。田中惣五郎『西郷隆盛』（吉川弘文館、1958年）116-118頁。

23) 前掲『西郷南洲遺訓』8頁。

24) 前掲『西郷南洲遺訓』6頁。

25) 『孟子』梁恵王篇の「仁者無敵」の教えはこのような仁政思想を代表するものである。

26) 前掲『西郷南洲遺訓』12頁。

27) 前掲『西郷南洲遺訓』13頁。

28) 前掲『西郷南洲遺訓』14頁。

29) 松本健一は「(西郷の利己主義批判は) 西洋の自己愛に発する個人主義・ナショナリズムが帝国主義化する道すじをも鋭く予告していた」(53頁)し、近代日本の侵略行動の草分けと見られる征韓論に賛成したことは西郷が利己主義への批判を忘れて侵略行為の支持者に転身したのではなく、彼の思考に「正道」への執着があるからだと主張している。その論拠としては、征韓論において、西郷が使節派遣から国交の交渉を始めることを再三強調していたことが挙げられている。松本健一「西郷隆盛における「文明」の理念」(『開国のかたち』所収、岩波書店、2008年)53頁。また、毛利敏彦と加藤陽子も西郷の「使節派遣」論に焦点を当てて、大陸侵略者としての西郷評価と異なる新しい西郷像を提起しようとしている。毛利敏彦『明治六年政変の研究』(有斐閣、1987年)と『明治六年政変』(中央公論社、1979年)、加藤陽子『戦争の日本近現代史』(講談社、2002年)参照。

ちなみに、上述した正道思想のほか、西郷の征韓論の、朝鮮領有という対外問題を通して国内の権力関係を調整し、国内の政治危機打開を図る点に注目する方向も見られる。要するに、明治政府内における権力抗争の中で、西郷の「征韓論」の登場は、本気で他者を懲らすことを意味するよりも、むしろ国内の種々の矛盾解消の有効な手段として選択された結果に過ぎなかったと考えられる。板垣退助宛の書簡(8月17日付)に示されているように、西郷にとって、韓国は「内乱を冀ふ心を外に移して、国を興こす遠略」を施す戦略的な空間にほかならないからである。こうした国内問題の解決策として対外問題に関心をよせる行動形式は、後の杉田定一(1851~1928)や大井憲太郎(1843~1922)、樽井藤吉(1850~1922)など自由民権者の対アジア意識に一定の影響を与えた。本山幸彦「アジアと日本」(橋川文三・松本三之介編『近代日本政治思想史I』所収、有斐閣、1971年)参照。

30) 前掲『西郷南洲遺訓』15頁。

31) 前掲『西郷南洲遺訓』13頁。

32) 前掲『西郷南洲遺訓』15頁。

33) 前掲『西郷南洲遺訓』11頁。

-
- 34) 「大西郷遺訓を読む」は1925年1月1日に政教社の『日本及日本人』に掲載され、3月に単行本として出版された。何度も版を重ね、大東亜戦争の進展に伴い、1942年に根本的改訂増補を加えて、『改訂増補 大西郷遺訓』として刊行した。それ以来、『改訂増補』版の「大西郷遺訓を読む」は定本として定着した。本論が引用した「大西郷遺訓を読む」は『改訂増補』に基づき、『頭山満言志録』（書肆心水、2006年）に収録されている。
- 35) 大久保や山県が相次ぎ豪邸に入居したことや、英人公使パークスの横着な態度に弄ばれるハイカラ政治家たちの情けない言動は、頭山満に痛烈に批判された。
- 36) 前掲『頭山満言志録』84-85頁。
- 37) 前掲『頭山満言志録』98頁。
- 38) 孫文と頭山満との会見詳細については、『頭山満翁正伝』（頭山満翁正伝編纂委員会編、葦書房、1981年）263-275頁参照。頭山に釘をさされたにもかかわらず、数日後、孫文は神戸で日本人を対象にして「大アジア主義」演説を行い、日本の拡張主義者たちが主張した侵略性のあるアジア主義と異なる彼なりの大アジア主義を提出した。彼は日露戦争以後日本の国際的地位の向上に言及する一方、西洋の功利強権中心の霸道文化を批判し、東洋の仁義道徳の王道文化の重要性をあらためて強調した。そして、アジアの国家中ヨーロッパの武力文化を学んで完全にこれを吸収した唯一の国家として、日本は仁義道徳を基礎に被圧迫民族を連合し、世界の被圧迫民族の不平等条約の撤廃に尽力せねばならないと説いた。
- 39) 前掲『頭山満翁正伝』266頁。
- 40) 頭山の「対支二十一カ条」への無批判とは反対に、一ジャーナリストとして独自の小日本主義を主張する石橋湛山が『東洋経済新報』でそれを侵略政策と見なして徹底的に批判したのは周知である。青島陥落に際して、湛山は1914年11月15日の社説で、「ドイツを支那大陸の一角より駆逐して、日本が代ってその一角に盤踞すれば、それが、何故に東洋の平和を増進することとなり得るや」「ドイツが青島をもてば東洋の平和に有害なれども、日本が青島をもてば東洋の平和に害なしという理由如何」（52頁）と述べ、青島の割取に大いに反対している。石橋湛山「青島は断じて領有すべからず」（松尾尊兌編『石橋湛山評論集』岩波書店、2008年）参照。
- 41) 竹内好「日本のアジア主義」（『日本とアジア』所収、筑摩書房、2007年）291頁。
- 42) 松本健一『竹内好「日本のアジア主義」精読』（岩波書店、2000年）117頁。
- 43) 勝海舟『勝海舟全集1幕末日記』（講談社、1976年）86-87頁。
- 44) 前掲『勝海舟全集1幕末日記』92頁。
- 45) 大江志乃夫は海舟の「征韓」という言葉を朝鮮出兵という侵略的な征韓論への支持と読み取っている。大江によると、連帯論から征韓論に急変した理由は不明であるが、抵抗なく武力征服論に転じたことは勝海舟の「封建支配階級内部のブルジョア的改良派」的性格の限界を完全に露呈している、という。大江は「人民的連帯でないかぎり、封建支配者相互間の連帯の呼びかけは、武力征服による服従の強制へと必然的に転化せざるをえない」と述べ、勝海舟の立場の急変を勝海舟自身の封建支配に対する無反省に帰している。大江志乃夫「征韓論の成立とその意義」『東アジア近代史の研究』（大塚歴史学会編、御茶の水書房、1967年）68-69頁。

-
- 46) 松浦玲は、日記に「征韓」という言葉が出たものの、海舟は終始アジア同盟論者であると主張している。松浦は巖本善治と勝海舟の征韓論否認の談話を引用し、勝海舟の朝鮮進出は武力の征服ではなく、実は朝鮮、中国と貿易しようとする意図が強かったし、神戸海軍操練所の設立は三国合縦連衡を目的としている。だが、当時京都を支配していたのは尊攘激派であるので、その思想そのものの特質により、決して対等の同盟論や外国と商売するなどの論点を受けつけない。それゆえ、海舟は操練所の設立を成功させるために「征韓」という慷慨勇壮な議論を飾って、尊攘激派の信頼と支持を利用するしかないのである。松浦玲『明治の海舟とアジア』（岩波書店、1987年）100-107頁。
- 47) 前掲『勝海舟全集1幕末日記』141頁、144頁、152頁。
- 48) 前掲『勝海舟全集1幕末日記』170頁。
- 49) 『氷川清話』（江藤淳・松浦玲編、講談社、2000年）221頁。ちなみに、海軍操練所の正式発足は1864年だが、海舟は1863年から私塾を開設し、諸藩士や浪人を収容していた。坂本龍馬がその塾頭であった。
- 50) 徳富猪一郎著・平泉澄校訂、『近世日本国民史86征韓論前篇』（時事通信社、1963年）23頁。
- 51) 勝海舟、「康有為に与うる書 明治31年」『勝海舟全集2書簡と建言』（講談社、1976年）392-393頁。
- 52) 原文：「我国は大いに貴邦と異なり、開国以来数百年、天皇を尊奉し、民不レ叛。纔かに叛民あるも、時の執権者倨傲にして其私を営み、民の疾苦を顧みざるに因り、激怒を發するによる。……近く四十余年前、外交の事興りしより、武家政治を廢絶し、国内郡県の姿勢を成し、悉く 天皇に臣従す」。前掲『勝海舟全集2書簡と建言』393頁。
- 53) 原文：「我國民は、性質慄悍勇猛にして、遠凶の識に乏敷、事に臨で激怒し易く、耐忍の力薄く、死を輕んじ、小節義を以て大節を疎んず。是、往時武士道の遺伝なり」。前掲『勝海舟全集2書簡と建言』393頁。
- 54) 前掲『勝海舟全集2書簡と建言』392頁。
- 55) 日清戦争以後の「戦争経営」が生んだ問題は、多くの社会問題の発生によって覗える。日本社会問題の旗手である横山源之助は1899年の『内地雜居後之日本』においては、日清戦争の勝利によって第一等国に列したものの、国内では軍備を拡張したために小作と労働者に対する収奪がかえって強化された、と明白に指摘している。日清戦争後、日本国内では労資間の対立が激化し、同盟罷工などの労働運動が頻発した。岩井忠熊の言葉を借りると、「国家そのものを否認しようとする社会主義の発生」がこの時期の重要問題である。『近代日本社会思想史 I』（古田光等編、有斐閣、1968年）206頁。
- 56) 勝海舟「「海軍小記」天覽に供す」、前掲『勝海舟全集2書簡と建言』341頁。
- 57) 勝海舟「朝鮮出兵慎重論 草稿」、前掲『勝海舟全集2書簡と建言』348頁。
- 58) 「朝鮮出兵慎重論 草稿」、前掲『勝海舟全集2書簡と建言』348頁。
- 59) 「朝鮮出兵慎重論 草稿」、前掲『勝海舟全集2書簡と建言』348-349頁。

-
- 60) 勝海舟、『氷川清話』（江藤淳・松浦玲編、講談社学術文庫、2000年）269頁。原文：「たとへ日本が勝つてもドーなる。支那はやはりスフィンクスとして外国の奴らが分からぬに限る。支那の実力が分つたら最後、欧米からドシドシ推し掛けて来る。ツマリ欧米人が分からないうちに、日本は支那と組んで商業なり工業なり鉄道なりやるに限るよ。一体支那五億の民衆は日本にとっては最大の顧客サ。また支那は昔時から日本の師ではないか。それで東洋の事は東洋だけでやるに限るよ。おれなどは維新前から日清韓三国合縦の策を主唱して、支那朝鮮の海軍は日本で引受くる事を計画したものサ。今日になつて兄弟喧嘩をして、支那の内輪をサラケ出して、欧米の乗ずるところとなるくらゐのものサ」
- 61) 前掲『氷川清話』269頁。
- 62) 典型的な例としては、戦前に平民主義の論客であった徳富蘇峰が遼東半島の返還に憤慨し、日清戦争後に国家権力の信者となり、帝国主義思想へと転向したことがある。
- 63) 「清話のしらべ」、1896年10月17日。巖本善治編、『新訂 海舟座談』（岩波書店、1983年）207頁。また、『女学雑誌』463号（1898年4月1月号）にも同様な意見が見られる。
- 64) 前掲『氷川清話』287頁。
- 65) 前掲『氷川清話』353頁。海舟の中国人の国民性への評価は『氷川清話』に散見される。日清戦争後、日本人の狂喜と威張りに比べて、中国人が驚くほど平静な態度を取れることは、海舟にとっては不思議なことであった。李鴻章や丁汝昌に対する高評もそうであるが、海舟は、中国人の平静さを気長で大きい性格と捉えている。一時の勝利だけで威丈高になっていた日本人の性格は比較的に短気である、という。この中国人の性格に対する認識は彼の植民地統治に対する考え方にも一定の影響を与えた。台湾が日本に割譲された際に、彼は具体的な統治方針には関心を寄せなかったが、国民性の観察に基づいて日本人がどのような態度で台湾に臨むべきかという意外な課題に注目した。彼は次のように指摘している。「台湾の総督は、天空海闊の大度胸のものでなくては駄目だ。小刀細工では治まらない。いや始終軍服を着け通しだからえらいの、いや角袖になつて、茶屋小屋などに登つて、役人の出入りを調べるから行き届いて居るの、などいふやうでは仕方がないサ」（249頁）。
- 66) 前掲『新訂 海舟座談』、207頁。原文：「オレは若い時、シナへ行って見て、万事の大きいのにビックリした。我が日本の事を思うと、何もかも小さくて、実に涙がこぼれた。その小さい中で、また小さな小党派の争いをしているのだよ」
- 67) 前掲『新訂 海舟座談』166頁。
- 68) 前掲『氷川清話』255頁。
- 69) 前掲『氷川清話』255頁。
- 70) 前掲『氷川清話』230頁。
- 71) 前掲『氷川清話』175-177頁。
- 72) 日本の公害問題の原点である足尾鉍毒事件について、抗議運動の旗手である田中正造『田中正造文集（一）鉍毒と政治』（岩波書店、2004年）と荒畑寒村が田中正造に頼まれて書いた『谷中村滅亡史』（岩波書店、1999年）参照。

-
- 73) 「内務大臣の鉍毒視察」(『時事新報』1897年4月13日、『福沢諭吉全集 15』所収、岩波書店、1990年) 649-651頁。
- 74) 福沢は5月28日日付けの社説に今回の鉍毒事件が政府側の責任取りによって鎮静化したことに対して不満を示した。なぜならば、政府側が法の立案義務をきちんと果たしたにもかかわらず、事故が発生する場合、鉍毒の発生は最早政府とは関係ないとする立場からである。彼は次のように発言している。「政府は既に権能の許す限りに於てあらゆる力を尽して処分の法を講じたることなれば、其責任は充分に全うしたるものと云ふ可し。故に若しも被害地の人民にして従来の損失を其俟に付すること能はずとて其補償を求めんとならば、之を法廷に訴へて法律上に争ふ可きのみ。また鉍山主に於ても万一この命令に服従すること能はざるの事情あらんには、是れ又法律に訴へて裁判を求むるの外ある可らず。而して裁判所に於ては如何なる判決を下すや知る可らずと雖も、其判決は日本国法の命ずる所にして、不服とあれば控訴上告たゞ法律上の手続を尽す可きのみにして、其最後の判決に至りてもいよいよ目的を達すること能はざるときは、最早や如何ともす可らず、只黙して国法の所命に服従するの外なし」。「足尾銅山鉍毒事件の処分」(『時事新報』1897年5月28日、前掲『福沢諭吉全集 15』所収) 670頁。
- 75) 「内務大臣の鉍毒視察」、前掲『福沢諭吉全集 15』所収) 650頁。
- 76) 「足尾銅山鉍毒事件の処分」、前掲『福沢諭吉全集 15』所収) 670頁。
- 77) 前掲『新訂 海舟座談』176頁。
- 78) 前掲『氷川清話』178頁。
- 79) 松浦玲『明治の海舟とアジア』(岩波書店、1987年) 188頁。
- 80) 栃木県日光市足尾地域は江戸時代から銅を産出していたが、1877年古河市兵衛が足尾銅山を經營して以来、近代化の採鉍技術の導入と1884年の富鉍脈の発見によって、産銅量が飛躍的にのび、日本一の銅の産地となった。銅は大正の中期までは日本の重要な輸出産品であり、国内産業の伸張とともに工業用資材として、その地位を高めていった。また、軍需産業の発展(それは重化学工業化の進展を意味するのであるが)は、更に銅の軍事・産業用物資としての重要性を増していった。そのような背景と時代的要請のもとに銅産業は増産を続け、供給を続けた。足尾銅山は、その中で先導的役割を果たしていたのである。
- 81) 明治13(1880)年11月30日は「進隣邦兵備略表」で、明治15(1882)年8月15日は「陸海軍拡張に関する財政上申」である。『山県有朋意見書』(原書房、1966年) 91-99頁、119-120頁。
- 82) 松永昌三『福沢諭吉と中江兆民』(中央公論社、2001年) 187頁。
- 83) 中江兆民「論外交」(『中江兆民評論集』所収、松永昌三編、岩波書店、2001年) 117頁。
- 84) 前掲『中江兆民評論集』117頁。
- 85) 前掲『中江兆民評論集』119頁。
- 86) 前掲『中江兆民評論集』120頁。
- 87) 前掲『中江兆民評論集』120頁。
- 88) 前掲『中江兆民評論集』122頁。
- 89) ホブスン著、矢内原忠雄訳『帝国主義論』上(岩波書店、1951年)。特に「1938年版への序文」と第四章、第六章を参照。

-
- 90) 前掲『中江兆民評論集』122頁。
- 91) 前掲『中江兆民評論集』122-123頁。
- 92) 中江兆民『三酔人経綸問答』（岩波書店、2005年）124頁。
- 93) 前掲『三酔人経綸問答』193頁。
- 94) 前掲『福沢諭吉と中江兆民』139頁。
- 95) 前掲『福沢諭吉と中江兆民』145-146頁。
- 96) 前掲『福沢諭吉と中江兆民』145-146頁。
- 97) 中江兆民は『一年有半』（1901年8月脱稿）の付録に収録された文章に、近時の国際外交とは「支那帝国の分割なり、欧洲強国の過大の海陸軍備の殺気の排泄なり、黄人に対する白人の種属的嫌悪心の発起なり」「科学的莫大の生産力を相殺するに付ての販路の拡張なり」「戦艦に追隨する商戦の侵入なり、平和の義名を粧ひたる攻掠なり、残酷なる愛国心の主張なり、文明の外皮を蒙むれる野蛮習気の暴露」に過ぎないのに、日本政府がこうした列強の弱肉強食の外交策に従うことで満足しているのは「大恥辱、大滑稽、大悲劇」と述べている。『明治文学全集13中江兆民集』（筑摩書房、1967年）196頁。
- 98) 前掲『帝国主義論 上』24頁。
- 99) 幸徳秋水『帝国主義』（岩波書店、2004年）19頁。
- 100) 前掲『帝国主義』85頁。
- 101) 前掲『帝国主義』21頁。
- 102) 前掲『帝国主義』23頁。
- 103) 前掲『帝国主義』26頁。
- 104) 前掲『帝国主義』26頁。
- 105) 前掲『帝国主義』27頁。
- 106) 前掲『帝国主義』27頁。
- 107) 前掲『帝国主義』49頁。
- 108) 前掲『帝国主義』49頁。
- 109) 前掲『帝国主義』49頁。
- 110) 前掲『帝国主義』112頁。
- 111) 前掲『帝国主義』40-41頁。
- 112) 前掲『帝国主義』103-104頁。

113) 幸徳秋水の『帝国主義』はイギリスの急進主義者であるジョン・マッキノン・ロバートソン (John Mackinnon Robertson) の『愛国主義と帝国』(Patriotism and Empire) をモデルとして構想されたものであると山泉進(「解説」、前掲『帝国主義』)が明らかにして以来、二作の比較考察が次々に行なわれてきた。山田朗は「幸徳秋水の帝国認識とイギリス『ニューラディカリズム』」(『日本史研究』1984年9月号)で文脈に該当する箇所を綿密に照らし合わせてロバートソンについての紹介を行なった。ベンジャミン・D・ミドルトン『幸徳秋水と帝国主義への根元的批判』(梅森直之訳、『初期社会主義研究』12、1999年)も、ロバートソンの著作が幸徳に大きなインスピレーションを与え、幸徳の帝国主義の政策に対する政治的解決を提案するに至ったと指摘している。しかし、幸徳の帝国批判の主張はロバートソンの論点に触発されたとはいえ、その思想背後の根底にある種の東洋的な倫理構造が見られることをここで指摘しておきたい。戦争や軍国主義を男らしさの表現と見て肯定する英雄主義的イデオロギーを批判するロバートソンの視座と異なって、幸徳は「戦争は陰謀なり、詭計なり、女性的行動なり、狐狸的智術なり、公明正大の争いにあらざるなり」と指摘し、戦争を女性的な営為と見なしている。ミドルトンは幸徳が「国家の軍事機構が(戦争を利用して)我がものとしている男らしさのイデオロギーそのものを横領」(148頁)するしかないという国家機器の略奪性を鋭く見抜いたと評価している。しかしその一方で、幸徳が戦争を女性らしい陰謀と譬えたとはいえ、戦争には「宋襄之仁」が無用であるように、「戦争はただ狡猾なるを要す、ただ譎詐なるを要す」(『帝国主義』78頁)という彼の「仁義のない」戦争認識は看過してはいけない。すなわち、幸徳の戦争批判は、男性性の奪還よりも、儒家の「大丈夫」思想に基づき、「仁義」の奪還を狙っているといっていよう。

114) 前掲『帝国主義論 上』19-20頁。

115) 資本家の資本蓄積を「利己心の発露」と見て悪玉化する東洋の道德論的な考えと比べて、近代啓蒙主義以来の西洋では資本主義の度外れの蓄積熱をある種の「個人意識」や「自由」精神の発露と見て肯定する傾向が見られる。

プロテスタンティズムの形成の原動力に資本主義のエートスを求めるウェーバーは、度外れの資本蓄積熱はプロテスタンティズムの禁欲精神から生まれたと説いている。彼は予定説に対する各派の反応によって、一つの「セクト化」の現象の形成経緯を抉り出した。それは、外力（教条など）への依存から内なる力（自らの信念）への信頼に推移する過程であり、そこに個人意識が浮かび上がるかどうか、この個人意識の生成を抑圧するさまざまなファクター（呪術、教条）に正面から意識的に対抗できるかどうか、という懐疑、抵抗、その克服を繰り返す精神構造の形成を指している。教条的なものを棄てて、常に自力の信仰心を求める精神が定着したゆえに、プロテスタントは宗教の俗化を敵視するようになるのではなく、かえって世俗的な営みに「神の栄光を増す」意味を読み取ることができた。人間が神の恩恵によって与えられる財貨の管理者である以上、私欲による非合理的な消費は否定されるが、神の栄光を増すための合理的な資本蓄積なら全肯定される。この禁欲の両面性が初めて度外れの資本蓄積熱をもたらしたとウェーバーは見るのである。

また、ノーマンは『日本における近代国家の成立』で幕末の社会経済と階層変動の相互関係に細緻な分析を加えるにあたって、各階層の互いの矛盾と連動をうまく把握し、社会内部の状況を有機的に捉えている。一方、日本近代の資本構成の過程を「歪み」として眺めているノーマンは、しばしば西洋からの眼差しに映されるある種の日本特有（あるいはアジア特有）のメランコリーを行間に洩らしている。典型的なのは、幕末の商人が財力を以って下級武士と結びついて幕末の封建社会衰退の重要な一因となる一方で、徳川の鎖国主義によって商業的野心が制限された一面を持っている、と指摘する際の視点である。あえて言えば、個人意志への絶対的な肯定と追求が西洋人にとって自明のものである限り、その「残念そう」な眼差しが、自己意志が自己以外の他者に制限され、拘束される現象に向けられるのは当然である。

さらに、アメリカの作家・哲学者であるアイン・ランド(Ayn Rand)が「合理的利己主義」という客観主義を提唱していることにも、個人主義による理性への肯定が見られる。彼女は1960年代の著作『利己主義という気概——エゴイズムを積極的に肯定する』（藤森かよこ訳、ビジネス社、2008年）において、資本主義とは、「自主独立の精神」を持つ人間同士が、相互利益のための自発的な交換によって、商人として取引することによってのみ成立する政治経済システムであると主張している。

116) 大アジア主義を掲げる大陸浪人は大陸進出肯定論の持ち主であったとはいえ、それぞれの主張には微妙な差異が存在している。例えば、頭山満は孫文をはじめとする中国ブルジョア革命派を支持したが、アジアにおける日本の皇道の実現を最終的に狙っている。また、荒尾精、根津一は頭山満らと親交を持ってはいたが、日本の中国での商業経営を前提として活動を行なった。彼らの手による日清貿易研究所や東亞同文書院の設立は商業人材の養成を目的としたのである。また、孫文と親交のあった宮崎滔天や北一輝のような、単純に中国革命の成功を望んでいた者もいた。一方、清朝政府の元大臣らと結託して清朝政府の復活を図ろうとした川島浪速、佃信夫らは、革命運動と真向から対立した大陸浪人である。大陸浪人は、趙軍の言葉を借りると、「中国とさまざまな関係を持っていた人々から成る集団」で「複雑な集合体」であった。趙軍『大アジア主義と中国』（亜紀書房、1997年）9-10頁。

117) 非戦論と主戦論が明白に二極化された日露戦争の言論界と異なって、日清戦争期には日本国内に主戦論が圧倒的に多かった。その理由を国家意識の高揚とまとめることは可能であるが、主戦論の背後に複雑な性格と因果関係があったことを見逃してはいけない。上記の福沢—頭山の基軸以外にも、様々な異質な対立が存在していた。例えば、儒教嫌いの福沢諭吉は当然であったが、漢学意識の強い漢学者や漢詩人たちには、腐敗の清国を座視せず、「儒教再建」の緊急の使命を感じ、かえって主戦論に支持した事例も少なくなかった。その他、日清戦争を「義戦」と見て日本を東西両洋の仲裁人として東洋の改革を望んだ内村鑑三、西洋文明への対抗を暗黙の前提として、東洋人を覚醒する使命感を強く意識した国粹主義者の内藤湖南などがいた。また、日本の極端な国家主義団体と外国市場を求める企業家の間に緊密な連携を成立させた立役者とノーマンに非難された荒尾精は、朝鮮問題を日中関係の「癌」と見て主戦を唱えたが、後日の日中貿易の友好のために寛大温かな戦後処理策を主張した。それは清国の再起を防ぐことを謀って多額の戦後賠償を要求した福沢と対照的であった。

118) 1867年3月29日父の新島民治宛ての手紙。『新島襄の手紙』（岩波書店、2005年）45頁。

参考文献

- E・H・ノーマン著、大窪愿二訳『ハーバート・ノーマン全集第二巻増補』（岩波書店、1987年）
—————『日本における近代国家の成立』（岩波書店、1993年）
- アイン・ランド著、藤森かよこ訳『利己主義という気概——エゴイズムを積極的に肯定する』（ビジネス社、2008年）
- 荒畑寒村『谷中村滅亡史』（岩波書店、1999年）
- 井上哲次郎「西郷南洲の思想系統」『日本及日本人』1925年1月号
- 大江志乃夫「征韓論の成立とその意義」『東アジア近代史の研究』（大塚歴史学会編、御茶の水書房、1967年）
- 内村鑑三『内村鑑三全集4』（岩波書店、1981年）
—————鈴木範久訳『代表的日本人』（岩波書店、1995年）
- 勝海舟『勝海舟全集1幕末日記』（講談社、1976年）
————『勝海舟全集2書簡と建言』（講談社、1976年）
—————江藤淳・松浦玲編『氷川清話』（講談社、2000年）
—————巖本善治編『新訂 海舟座談』（岩波書店、2009年）
- 加藤陽子『戦争の日本近現代史』（講談社、2002年）
- 小泉信三『福沢諭吉』（岩波書店、2001年）
- 幸徳秋水『帝国主義』（岩波書店、2004年）
- 竹内好『日本とアジア』（筑摩書房、2007年）
- 田中正造『田中正造文集（一） 鉅毒と政治』（岩波書店、2004年）
- 田中惣五郎『西郷隆盛』（吉川弘文館、1958年）290-291頁
- 趙軍『大アジア主義と中国』（亜紀書房、1997年）
- 土屋元作『余が見たる福沢先生』（三和出版社、1903年）
- 同志社編『新島襄の手紙』（岩波書店、2005年）
- 頭山満『頭山満言志録』（書肆心水、2006年）
- 頭山満翁正伝編纂委員会編『頭山満翁正伝』（葦書房、1981年）
- 徳富猪一郎著、平泉澄校訂『近世日本国民史86征韓論前篇』（時事通信社、1963年）
- 中江兆民『三酔人経綸問答』（岩波書店、2005年）
—————松永昌三編『中江兆民評論集』（岩波書店、2001年）
————『明治文学全集13中江兆民集』（筑摩書房、1967年）
- 西川長夫『[増補]国境の越え方——国民国家論序説』（平凡社、2001年）
- 橋川文三『橋川文三著作集3』（筑摩書房、2000年）
- 福沢諭吉『福沢諭吉全集10』（岩波書店、1970年）
————『福沢諭吉全集14』（岩波書店、1970年）
————『福沢諭吉全集 15』（岩波書店、1990年）
- ベンジャミン・D・ミドルトン著、梅森直之訳「幸徳秋水と帝国主義への根元的批判」（『初期社会主義研究』12、1999年）

ホブスン著、矢内原忠雄訳『帝国主義論』上・下（岩波書店、1951年）
マックス・ウェーバー著、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波書店、1989年）
松浦玲『明治の海舟とアジア』（岩波書店、1987年）
松尾尊允編『石橋湛山評論集』（岩波書店、2008年）
松永昌三『福沢諭吉と中江兆民』（中央公論社、2001年）
松本健一『竹内好「日本のアジア主義」精読』（岩波書店、2000年）
——『開国のかたち』（岩波書店、2008年）
毛利敏彦『明治六年政変の研究』（有斐閣、1987年）
——『明治六年政変』（中央公論社、1979年）
本山幸彦「アジアと日本」（橋川文三・松本三之介編『近代日本政治思想史 I』所収、有斐閣、1971年）
山泉進「解説」（『帝国主義』岩波書店、2004年）
山県有朋『山県有朋意見書』（原書房、1966年）
山田朗「幸徳秋水の帝国認識とイギリス『ニューラディカリズム』」（『日本史研究』1984年9月号）
山田済齋編『西郷南洲遺訓』（岩波書店、1993年）

明治期の文明理念の諸相とその意義

2010年3月

第1版第1刷発行

非売品

編集・発行 : 富士ゼロックス小林節太郎記念基金
〒107-0052 東京都港区赤坂9丁目7番3号
電話 03-6271-4368

Printed in Japan